

日本医史学雑誌

第 22 卷 第 2 号

昭和 51 年 4 月 30 日発行

第77回 日本医史学会総会抄録

特別講演

- 江戸時代における石川県医学史……………津田 進三…(95)
富山藩の薬業と本草……………難波 恒雄…(101)

会長講演

- 石川県医学教育における外人招聘教師とその周辺
……………高瀬 武平…(104)

原 著

- 林洞海の晩年の感懐と書簡……………土屋 重朗…(140)
酒湯記録より見た痘瘡・麻疹・水痘の大奥への
伝播……………前川久太郎…(157)
小浜藩における林野家(小石元俊の祖)の事蹟に
ついて……………田辺 賀啓…(169)
200年前のアメリカ医学……………Ilza veith 緒方富雄訳…(181)
雑 報……………(195)

通 卷 第 1402 号

日 本 医 史 学 会

東京都文京区本郷 2-1-1
順天堂大学医学部医史学研究室
振替口座・東京 15250 番
電話 03 (813) 3111 内線 544

クルムスターヘル ・アナトミア

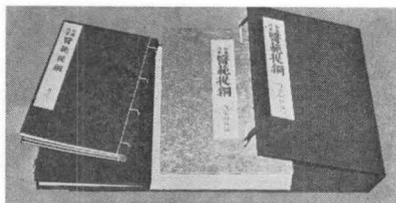


雄三 富三 緒方小川
蘭学事始で主役を演ずるターヘル・アナトミアは解体新書翻訳の原著で、ドイツ語の原著第二版の蘭訳本である。今年解体新書出版二〇〇〇年にあたる。この歴史的な機会を一層意義あるものとするため、われわれの先駆者が使用したのと同版のターヘル・アナトミアを復刻。別巻として小川・緒方両先生の解説と、解体新書全四巻の縮写版を添付。

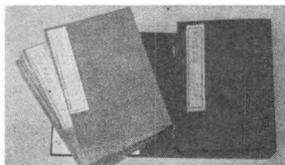
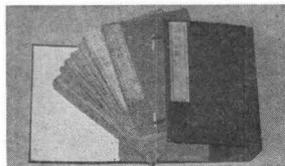
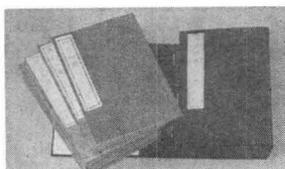
付・別巻
解体新書(縮写版)
限定五〇〇部
価二五、〇〇〇円
送料 四五〇円

綱提範医 全3巻 綱提範医 全1冊

内象銅版図
内象銅版図
濃紺地布貼特製軼入
巧オフセツト印刷・土佐猪手漉和紙・精巧タイプ印刷・濃紺地布貼特製軼入
福井手漉局紙厚紙志折帖仕立・精巧コロタイプ印刷・濃紺地布貼特製軼入
限定版三〇〇部
価 三八、〇〇〇円



調玄間本 内科秘録 瘍科秘録 続瘍科秘録



全14冊
全12冊
全5冊

解説
本書は、華岡青洲・シーボルトに師事して出藍の誉れ高い日本外科学の先覚者、棗軒・本間玄調の著作である。当時医師の金科玉条とされ、特に正統瘍科秘録は、華岡流の外科学の奥義の秘法を公開したもので、天下の耳目を聳動させたといわれ、ために玄調は青洲より破門されたと伝えられている。

内科秘録は、玄調六十一才の著で、漢方内科に非凡の学識を示し、再度当時の医学界を驚嘆させたものである。

瘍科秘録・内科秘録共に稀覯本として、入手・閲覧が困難で、現在も尚医学教課の資料・参考書としても高く評価され、医学の高度に進歩した今日も依然として光彩を放っている。この巧芸版は、原本に忠実に復刻したもので、医学者の研究・教育資料として、また、古典籍愛好家の鑑賞用・保存用として、貴重な文献である。(矢数道明氏蔵)

本文Ⅱ特漉因州楮和紙・コロタイプ印刷・和綴じ 軼函Ⅱ内科秘録 金茶緞子織 瘍科秘録・続瘍科秘録 紫紺紋柄装・豪華特製 上質紙張美麗箱入 価Ⅱ内科秘録 拾七万円 瘍科秘録 拾貳万円 続瘍科秘録 八万円

第77回日本医史学会総会演題目次

特別講演

江戸時代における石川県医学史……………	津田進三……………(1)
富山藩の薬業と本草……………	難波恒雄……………(7)

会長講演

石川県医学教育における外人招聘教師とその周辺……………	高瀬武平……………(10)
-----------------------------	---------------

一般口演

1、いわゆるターヘル・アナトミアの脚註について(その1)……………	酒井恒……………(12)
2、セミナーと日本医学小史……………	寺畑喜朔……………(13)
3、福井藩最初の解剖者半井彦について……………	岩治勇一……………(15)
4、坪井信良と福井—佐渡家文書を中心として—……………	竹内真一……………(16)
5、加賀藩医・吉田長淑の「和蘭書籍目録」について……………	宗田一……………(17)
6、アルブレヒト・フォン・ローレツとその顕微鏡学講義……………	藤野恒三郎……………(18)
7、江戸時代京都における医家門人帳について(二)……………	杉立義一……………(19)
8、「瘍医新書」の研究(第一報)(紙上発表)……………	大島蘭三郎……………(20)
9、湯治と薬師信仰……………	中沢修……………(21)
10、古経「治禪病秘要法」とそれが我国の精神医療に及ぼした影響について……………	泰井俊三……………(22)

- 11、 弥勒ボサツ下生経と治病信仰…………… 関根正雄 (23)
- 12、 唐ノ清間における「医師」の官より見た医者の地位について…………… 山本徳子 (25)
- 13、 日本古代医療官人の出自について…………… 新村拓 (26)
- 14、 医学の文芸化について…………… 三木栄 (27)
- 15、 佐々木中沢と大槻玄沢…………… 山形敏一 (29)
- 16、 再び「安産仙翁邦言教諭」について、付・五十嵐汶水の生涯…………… 玉手英典 (29)
- 17、 Hermann Lebert (1813~1878): Handboek d. Praktische Geneeskunde. Groningen, 1861—1863とその訳書(坪井芳洲訳述『医療新書』一八六八及び『列別児篤氏・窒扶斯病論』一八七九)ならびにその意義(最初の病理解剖を基盤とした臨床学の受容)…………… 阿知波五郎 (32)
- 18、 宇田川榕菴の著者に見られる呼吸及び酸素に関する記載…………… 矢部一郎 (33)
- 19、 京都療病院におけるヨンケル…………… 大矢全節 (35)
- 20、 九大初代学長大森治豊先生のスライド…………… 宇留野勝弥 (35)
- 21、 邦訳「解体生理図説」とその原著者維廉杜兒寧兒(ウィリアム・ターナー)について…………… 蒲原宏 (36)
- 22、 指紋法の発見をめぐる…………… 長門谷洋治 (37)
- 23、 アメリカ合衆国の独立二〇〇年と医師ベンジャミン・ラッシュ…………… 古川明 (38)
- 24、 明治二〇年代の順天堂における手術…………… 酒井シツ・鈴木滋子 (40)
- 25、 大正期学校衛生史の研究(一)北豊吉…………… 杉浦守邦 (41)
- 26、 スクリーニング史の二、三駒…………… 三輪卓爾 (43)
- 27、 ヘルス・サービスとモーラルのフィロソフィ…………… 栗本宗治 (44)

特別講演

江戸時代における石川県医学史

津 田 進 三

江戸時代の石川県はごく僅かの天領を除いてすべて加賀藩とその支藩の大聖寺藩に属したが、幕府に対する保身のため前田氏は積極的な文化政策をとって学芸を奨励したので、次第に独特な加賀文化を形成するに至った。

医学については、藩初以来終始京阪の医学の移入摂取につとめ、のち更に長崎の医学、江戸の医学も加わったが、この間笈を負って良師を求めるもの多く、その学統は頗る多岐にわたっている。そのため江戸時代における石川県医学史を体系づけることは容易ではないが、早くから漢蘭折衷派が支配的となったので、それに続く蘭学の興隆が目覚ましかったことはその特徴といえよう。

一、江戸時代以前の医学

石川県は古く越前国に属したが、大和政権の大陸政策と東北経営の必要とから八世紀はじめの養老二年（七一八）に先づ能登国が分離独立し、加賀国ははるかに遅れて九世紀に入った弘仁十四年（八二三）にやっと越前国から独立した。

上古の能登では福浦に渤海の使者のために客館が設けられ、また大陸からの漂流民の定着も多かったため、「鳳至の孫」説話の犀角のように医薬品の密輸もあったようである。承和元年から三年迄や貞観六年などに加賀能登に疫病が流行した

際には、両国に豊富な薬草が用いられたことと思われ、又正倉院に現存の「越前国江沼郡山背郷計帳」（天平十二年）には加賀の男女の灸あとが記されている。

中世では僧医又は寺院の売薬がかなり広く行なわれ、特に養老元年泰澄により開かれた石動山天平寺では、諸国勸進に「大同類聚考」所収という「伊須流岐の一本薬」を携えたが、これは「いすぎるの僧正廻り」として連綿と伝えられて近年まで加減四除湯・五靈膏などとして販売されている（「能登石動山」による）。

そのほか天台寺院の「混元丹」（医王山）、浄土真宗の「赤玉丸」（頭如上人直伝）、禅宗の「隠元酒」（順気御薬酒）等が知られている。

一方能登の守護畠山氏の臣神保氏は金創医として知られるが、天文年間畠山義総は京から禁裡医竹田定珪を能登に招いたのでその家方「牛黄円」がひろまり、更に畠山義綱は永禄十一年曲直瀬道三から医道の伝授を受けている（宮本義己氏による）。

二、江戸時代の医学

(1) 京阪の医学の移入と南蛮医学

天正二年（一五七四）朝倉の遺臣江間竹林坊を前田氏最初の藩医に迎えたが、文禄四年（一五九五）宇喜多秀家に嫁した娘豪姫の奇疾を曲直瀬正琳が治して以来曲直瀬氏を終始扶持し、屢々その来診を乞うている。更にその後も山科長安、大石玄哲、南保玄達など主として京阪の名医を次々に藩医に招いたので、大聖寺藩医斉藤玄碩などのように京に上って曲直瀬氏又はその学派に学ぶ者が多かった。

一方慶長十六年（一六一一）幕医坂浄珍と曾谷寿仙が来診し、寛永十七年（一六四〇）には野間玄琢が金沢へ派せられるなど幕医の来診も頻繁になったが、その後は江戸屋敷への影響にとどまったようである。

これよりさき天正十六年高山右近が前田氏に仕えて金沢と能登二ヶ所とに聖堂（南蛮寺）を建立し、慶長八年（一六〇三）以降神父も滞在したので、恐らく南蛮医学が行われた事と思われるが全くその記録を失っている。尚右近の子孫は世々医を業とし、高山節庵など蘭方をもって知られている（カステラン氏による）。

(2) 本草学と非人小屋の救療

前田綱紀は自然科学に深い興味を抱き、自らも樟腦の製造などを志したので、県内の本草学は著しく發達した。

寛文十年（一六七〇）金沢へ招かれた向井元升は翌年「庖厨備用倭名本草」を編纂したが、元禄六年（一六九三）わが国正統派本草学の祖といわれる稻生若水が金沢へ来て綱紀に仕えた。

元禄八年「庶物類纂」一千巻を著すため京へ移った稻生若水は、正徳五年（一七一五）業半ばにして没したので、徳川吉宗の命をうけた若水門人の幕医丹羽正伯と加賀藩医内山覚仲らが増補して元文三年一千巻に達し、延享四年更に補編五百十四巻も完成した。

稻生若水の本草学は内山覚仲、同覚順らにうけつがれ、また若水門人松岡玄達及び津島常之進に学んだ樫田玄覚とその子順格が大聖寺藩の本草学を創始した。更に松岡玄達門人小野蘭山からは加賀の坂元慎、能登の村松標左衛門らが出たが、奇行をもって知られる津田随分齋は門人ながら蘭山から兄事をもって遇されている。

寛文十年（一六七〇）前田綱紀は金沢郊外笠舞村に「非人小屋」を設けて窮民を收容したが、特に病人には給付を厚くし、本道、外科の医師を置いて救療した。このとき收容者の中から人をえらんで病者の看護をさせ、更に治癒の上は生計の途を与えて退去せしめている。この非人小屋の開設は小石川養生所に先立つこと約五十年である。

この前田綱紀はまた蒐書をもっても知られ、天和二年（一六八二）遠く和蘭からドネウスの本草書を得ている。

(3) 明倫堂の医学と漢蘭折衷派

天明四、五年の疫病大流行をみた前田重教は藩医横井元泰らを医学稽古の指引に任じて自宅にて講習を行なわせたが、寛政四年（一七九二）加賀藩校「明倫堂」の開設と共に同所にて医学教育も行なわれる事になった。はじめ畑医学院に学んだ内藤宗安が医学教授を命ぜられたが、その開講は遅れて寛政八年小川玄益によってなされている。

明倫堂の医学教育は月三回行なわれ、「傷寒論」などの講義と会読と本草とが各一回であった。更に天保十一年（一八四〇）以後は従来町会所役人により行なわれていた医業試問を明倫堂医学指引が行なうこととなっている。

加賀藩老前田土佐守侍医荻野正玄の子の元凱は、寛政四年金沢へ来診して三十人扶持を受けたが、荻野元凱は早くから蘭学に接して明和七年（一七七〇）「刺絡篇」を著し、更に河口信任らの解屍にも立合った。

一方寛政十年の小石元俊ら施薬院の解屍には加賀小松の梁田元長が列っており、津田随分齋もまた解剖に習熟していたにもかかわらず、更に後年の蘭学興隆期も含めて石川県内では明治まで何故か遂に一回の解剖も行なわれなかったようである。

これよりさき宝暦元年山脇東洋に師事した能登鶴川の多田周平をはじめ、吉益、香川など古方派の門に学ぶものが次第に多くなり、のち吉益北洲は弘化二年金沢に迎えられて藩医となっている。

そして彼ら古方医は早くから漢蘭の折衷をめざしたようで、明和二年能登の坂東文二は大阪の林春庵に蘭方を学び、同四年に土山春道は大阪の榎林氏に学んでいる。また文化四年富来の伊藤祐順は吉雄氏の蓼莪堂に入ったが、特に華岡青洲へは最も多数の入門者があり、そのうち中野通庵、片山大安、森良齋らは塾頭になっている。

(4) 蘭学の興隆と壮猶館

天明八年（一七八八）能登七尾へ往診した小石元俊には横川仲藏、梁田養元らが入門し、寛政九年七尾の宜山文沢が大

槻玄沢に学んだが、加賀藩の蘭学は文化五年（一八〇八）宇田川玄真の金沢への往診にはじまっている。その翌年玄真の門人藤井方亭が最初の蘭方藩医となり、同七年には吉田長淑も加わった。この吉田長淑はわが国最初の蘭方内科医として江戸に開業し、多数の門人を養成した。

そして「蒲剛先生医方集要」の大高元哲、「眼科新書附録」の松田東英、「泰西藥名早引」の横井璨など名をなす者が次第に多くなり、弘化三年（一八四六）坪井信道に学んだ黒川良安が藩医となるに及んで県内の蘭学は著しく進展した。

この間シーボルトに師事した大聖寺の竹内玄同などのように良師を求めて京阪、江戸及び長崎の各地へ遊学したが、特に小石元瑞、小森桃塙、新宮涼庭などに学ぶ者が多かった。中でも緒方洪庵の適塾へは最も多く入門し、渡辺卯三郎、津田淳三らはその塾頭に推されている。

安政元年（一八五四）加賀藩は洋式藩校「壮猶館」を開設し、黒川良安、高峰精一らが蘭書の翻譯に当り、文久二年（一八六二）には蘭医書の会読を開始すると共に蘭方医の開業試問を行なうこととなった。

(5) 種痘の普及と卯辰山養生所

嘉永三年（一八五〇）二月隣藩福井藩の笠原良策の好意によって分苗をうけた黒川良安は、明石昭斉、黒川元良及び津田随分斉らと社中を結んで初めて種痘を行なった。

ついで安政四年（一八五七）津田淳三らは私立の堤町種痘所を開設したが、文久二年（一八六二）藩営の彦三種痘所となり、更に慶応元年には加賀藩種痘所となった。この間黒川良安らにより伝習をうけた医師たちによって能登加賀の全般に種痘が行なわれている。

慶応三年（一八六七）前田慶寧は福沢諭吉の「西洋事情」を読んで病院の設置を決意し、「卯辰山養生所」を開設した。百人収容のこの病院では一人宛の病床を具えて二十人の看病人を配し、薬種と衣食代の費用負担別に病人を三等に分

つほかは、全く四民平等の治療を行なった。そして偶々戊辰越後戦争に際会してその負傷者を收容し、下肢切斷術を行なうなど顕著な功績をあげたのである。

更に卯辰山養生所には「医学館」を併設して医師の養成を行ない、特に漢蘭折衷医のために期日を定めて「扶氏經驗遺訓」の講義を行なうなど、いままさに特異な石川の医学を樹立せんとする機運の中に、まもなく明治維新を迎えたのである。

(金沢市開業)

特別講演

富山藩の薬業と本草(要旨)

難 波 恒 雄

富山藩は、寛永十六年(一六三九)加賀藩三代前田利常の次子利次に一〇万石を分け支藩としたのに始まるが、分藩以来多くの家臣を抱え、参勤交代、幕府の委託事業等のため終始財政難に苦しめられてきた。富山藩の領地は山岳地帯がその四分の三以上を占め、海岸線は神通川の一部にのみとどまり、経済的発展は非常に困難であった。

従来富山売薬発生の記録は、宝暦年間(一七五一頃)以後の売薬業者の書き上げがもととなっており、そこには多分に宣伝的な要素が含まれまた誤謬も多い。

富山藩に売薬が発生するにはそれなりの時代的背景があった。それらの要素を列挙すると次の如くである。

一、日本海沿岸と中国大陸との文化交流。

二、室町時代に興る成薬業。明応二年(一四九三)〜天正六年(一五七八)に越中富山の地に薬種を営む「唐人の座」が存在したこと(『富士山之記』)。江戸時代元和八年(一六二二)に薬種商「茶の木屋」開業(『中田家譜』)。

三、山岳信仰に併う立山衆徒の配札檀那廻り。護符、経衣などを予托する。

四、富山藩の経済状態。

五、二代藩主前田正甫の合薬の研究、製薬奨励。

富山売薬の創始者とされている前田正甫の書簡、当時の藩の諸記録などから察するに、正甫の時代には富山売薬はそれ程盛んではなかった。しかも富山「反魂丹」販売に関する充分な史料は見当たらない。「反魂丹」に富山藩が関与する正式な記録は、元文五年（一七四〇）の売薬調べからであって、それまでは薬種業者の自主的な商売であったものと思われる。富山反魂丹が盛んになるのは、上田秋成の『諸道聴耳世間猿』に「近年は売薬が繁昌し、勸学寮の錦袋丹、富山反魂丹、後藤黒丸子、大黒屋の地黄丸に小田原外郎、俵屋ふり出し云々」とあることから、明和年間（一七六四頃）頃からである。従来の史書には「反魂丹役所」なるものが文化年間（一八〇四〜一八一七）頃設立されたとされているが、富山藩の現存する武鑑にはこの役職は見られず、各種通達書の中にのみみられる。

富山売薬は一八世紀の中頃から藩の一事業として取り上げられ、種々の通達がだされ、取締りが行なわれるようになり、国の名産としていった。そのためには、反魂丹商売人に対する各種の心得が示され、それらの商売道徳が、富山の売薬を今日まで継続させた一因にもなっている。

ところで、富山売薬が発生した元禄享保の頃は、薬物の学問である本草の学が、幕府の国産品奨励とあいまって隆盛を極めた。本草という学問は元来薬物の学問で医学の科として中国において発展してきたものであるが、日本においては、それが伝来された時点から広く動、植、鉱物の名物を明らかにしようとする傾向があった。江戸の本草隆盛期においても幕府、諸藩の経済的な事情からこのような名物学は国益に繋がるものとして奨励された。また当時医学における天人合一論が唱えられ、博く天地人三才の事理に通ずべきであるとする思想の流れがあり、天然自然の理を学ぶ医家が増え、こうした傾向は中国において薬物学的内容をもった本来の本草学が、日本において名物学から更に発展して博物学的内容を帯びるのに益々拍車をかけたのである。

江戸時代の本草のこのような博物学的、物産学的傾向を反映した著作として第一にあぐべきものは、加賀藩の医官稻生若水（一六五五〜一七一五）の『庶物類纂』一〇〇〇巻、増補五四巻である。この書は元禄九年（一六九六）加州侯前田

綱紀の命により編纂が始められ、後若水、綱紀共に歿したため、完成は幕府の手に移り、將軍吉宗の命をうけた若水の門人丹羽正伯らによって元文三年（一七三八）に完結したものである。この老大な書は加賀百万石をして始めて計画されべきものであった。名物、物産研究は国益に繋がるとはいえ、それは直接的なものではなく、相当の経済的な余裕が必要であったと思われる。加賀藩からは若水の門下生として内山覚仲、覚順が、また松岡玄達の門下生津島恒之進、直海龍らが輩出し、特に高岡の人津島恒之進は玄達の学頭をした人で、京師で本草家として一家をなした。加賀藩からはこのように多くの本草家がでていますが、売薬を藩の一事業としていた富山藩からは世に本草家と称された人材はほとんどでておらず、僅かに幕末の一〇代藩主前田利保（一八〇〇〜一八五九）のみである。このことは当時の本草の性格が薬と遊離していたことによるものであろう。前田利保の編著『本草通串』は未完成ではあるが、若水の『庶物類纂』にさらに和書文献をも加え当時の物産を集大成しようとしたもので、その学問に対する意気込みを窺い知ることができる。それと共に加賀藩に対する意識も多分に感じられるのである。利保は本草学者として名高いが、その本質は博物学の研究にあり、特に植物において「リンネの植物分類表」を写本したり、植物形態学の研究書である『本草徴解』などを書き残している。また江戸周辺や藩内で植物採集をした詳細な記録である『万香園裡花壇綱目』五巻を著わしている。これらから察するに利保の研究は、日本において本草学が博物学に変容し、さらに博物学が純粋な植物学や動物学などに転換していく時代的傾向をそのまま受容しており、売薬奨励の地の藩主として、自らの本草研究を売薬といかに関連付けていくかということとは、それ程念頭になかったように思われる。ただ、天保九年（一八三八）頃には薬草培養懸りを設け、甘草や地黄の苗を信州、和州などから取り寄せ、富山城内御鳥場跡土手、藩士屋敷の空地や、大久保、布瀬の両村に試作させており、また薬種商のもってきた薬物の鑑定に依じているから、そのような面で幾分自藩の売薬産業と関わりをもったが、売薬製造、処方改良などといった本来の売薬事業は、すべて業者まかせであったといえよう。

（富山大学和漢薬研究所教授）

会長講演

石川県医学教育における外人招聘教師とその周辺

高 瀬 武 平

藩幕政府後期より明治維新政府の初期にかけて、西洋医学が多く、点ですぐれていることを、全国一般が事実を以て感得したものは、種痘の成果と外科学の成績であったと思われる。就中前者に対しては一般に奇蹟の感があったものと推察される。当金沢地方でも、前田藩はこの機運に着眼したものであったと思われるが、文久二年三月に、現金沢市の中央部である金沢市彦三町八番丁に種痘所（反求舎）を建設した。種痘所は目覚しく発展したため狭隘となり、元治元年、金沢市南町心学所に移転して、金沢藩種痘所と命名された。更に慶応三年藩主前田慶寧は卯辰山養生所の建設を命じている。このものは病院部門が設置され、医学館、菜圃が附属させられた。

明治三年四月嵯峨寿安（金沢市十三間町医）が藩留学生としてロシア行を許可されており、日本人として最初にシベリア横断をしている。同年藩籍奉還が許可され、前田慶寧は金沢藩知事に任命された。

明治三年一二月オランダ一等軍医ペー・アー・スロイスの雇用が決定され、同氏は明治四年三月四日医学館に着任している。以上は陰曆をそのまま使用したが、明治五年一二月三日太陽曆が採用され、この日が明治六年一月一日とし、時刻の呼称も改った。

彼スロイス氏は明治七年九月任期満了となり帰国した。スロイス氏の後任として、明治八年八月オランダ人アー・ホル

トルマンが招かれている。明治一二年一月ホルトルマンは新潟医学館へ転任し、明治一三年四月オーストリー人ロレッツが着任した。この時期を境として金沢藩においては、医学教育がオランダ医学からドイツ医学への方向転換する傾向が見られ始めたが、全国特に東京を中心として医学教育がドイツ流に変わった流れに従ったものと思われる。

以上の間、キンストレーキの購入、コレラ病の流行等があり、各々の外人教師への接触、各教師の挿話、風評等につき紹介する。

(金沢大学医学部教授)

一般口演

いわゆるターヘル・アナトミアの

脚註について(その一)

酒井恒

本文については前回までに報告したので、今回は、その第一表の脚註の内容を紹介する。

解剖学とは、本来、人為的からだを切り分けることを意味するが、更に、からだの組成、本質、役目についての明確な概念をも意味している。その知識は、実際に解剖することにより、有能な解剖学者の教育により、また、良い書物を読むことによって得られる。

対象の項では、解剖学には明確な図と記載が必要であり、また、死体の解剖により、動物の解剖の重要性がわか

ると説明している。すなわち、死体では蠕動運動、心臓の動き、血液循環、繁殖等をみることはできない。また、ドイッでは、死体の入手が困難であり、一、二体の解剖ですべてのものを正確に調べることが時間的に困難であることを挙げ、動物による解剖学的発見が医学に大いに貢献しているので、感謝の気持ちをもって動物を解剖すべきであると述べ、次いで動物解剖学、比較解剖学の著書を紹介している。

分類の項では、血液については、更に血管学、動脈学、静脈学が分けられ、また、体液学もあるが、これは体液のみならず、その管全体をも含むことを述べている。

道具については、顕微鏡は、肉眼で見ることのできない小さいものを観察するもので、魚の血液循環をみることでできると説明している。

更に、ヒポクラテス以来の解剖学の歴史、解剖学者の経歴およびその著書について、簡単に紹介し、最後に、解剖学が、医学および外科学に甚だ役立つことを強調し、船の羅針盤にたとえ、解剖学の知識無しに患者を扱う危険を戒めている。また、解剖学が医者以外のすべての人に必要で

あり、また、神の叡智と全能とを知り、それを賞讃すべきであると言き、からだの各部の關係において、どんなに小さい部分でも、無駄に作られたものは一つもなく、而も、これらが生命の維持には欠くべからざるものであると説いている。

以上の内容は、文章としては、本文より遙かに難解であり、解剖学、動物解剖学の重要性を強調し、動物を解剖する際の心得をも説き、また、からだのすべての部分が、生命の維持に不可欠であることを述べ、造物主の叡智と全能にも触れ、宗教の影響が強く察せられる。

(名古屋大学医学部解剖学教室)

セミナーと日本医学小史

寺 畑 喜 朔

医学教育の中で医学史をどのように教育するか、医学史教育のおかれている位置はどうか。試みの一つとして、医学史教育を通じ、先達の業績に触れ、ついに医の倫理問題に到達することを目標にすれば、その教育効果は十分といわねばならない。

演者は、第一学年一〇名の学生を対象にし、「医学の歴史的展開」をテーマとして一年間セミナーを開設した。基本教材は蘭学事始で、小塚原における腑分けの項をターヘルアナトミア(複製版)を回覧しながら、第一回のセミナーを始めた。回を重ねつつ蔵志、解体新書、重訂解体新書、医範提綱、明治期の解剖書、現代解剖書……と一連の解剖書の内容について、初歩的解説を行なった。学生は、かなり関心を示し、医学生だと自覚を深めた。

夏期休暇中は、学生各自に郷土医学の発達を調査研究する（四〇〇字詰、二〇枚以上の論文作成）よう指示した。

各自の論文を集成すると、つぎのような構成となった。(1) 奈良時代の医学、(2) 後世派と古方派、(3) 西洋医学の導入と地方蘭学の発達、(4) ドイツ医学からアメリカ医学へ……これは、わが国医学の中国医学→蘭医学→ドイツ医学→アメリカ医学の流れを如実に示すものとなった。

演者は、学生の記述した資料を修正加筆し、序章、終章をまとめて、金沢医科大学教養部論文集第三巻に掲載した。学生は活字になった「セミナーと日本医学小史」の別刷を手にして、かくせない喜びをのべた。

一年間の後半は、解剖学教室より借りた人体骨格標本をレントゲン写真と対比させながら、独自の骨学実習を実施した。この実習に学生は期待以上の情熱を示した。マンネリ化した医学教育を打破する一つの試みであるが、第一に医学生であるとの自覚を深めさせることができたと確信している。

本学は進学課程、専門課程が同じキャンパスにあるので、この企画は成功した。今日大学教育のデメリットの

つとして、教養部のあり方が論ぜられている。一方、昨年文部省が示した医学教育基準改正案をみてもわかるように、医学教育六年間の一貫教育の進め方も、演者の視点に従えば、決して困難なことではない。要は実践である。

（金沢医科大学）

福井藩最初の解剖者

半井彦について

岩 治 勇 一

杉田玄白、前野良沢らの明和八年（一七七二）解剖の二年前、福井明里において、半井彦、山室知将（松軒・松庵）の医師により解剖が行なわれた。明和六年（一七六九）十一月十九日のことである。

京都の医師山脇東洋により日本最初の人体解剖が行なわれたのは、宝暦四年（一七五四）のことであるが、このことが刺戟となって、実証的な科学精神にもとづく解剖が、福井で実施されたのである。この時の記録が「滅鑑」である、現在東京大学名誉教授小川鼎三博士により所蔵さる。

扱この解剖者筆頭の半井彦であるが、爾来如何なる人物か不明であった。たまたま岡田輔幹自筆の「白雪和歌集」文化六年（一八二三）正月十二日のものであるが、そ

の巻尾にある福井歌人名列（福井の大歌人井上翼章が文化二年に一三六名を集録、松軒・山室知将の名もある）の中に「彦・通称半井道川」を見出し、更に幸い県立図書館松平家文書「御医師御鍼医御目医師御外科御記録」中に、半井道泉の記録を知ることが出来、年代的にも付合したのである。

越前半井家であるが、初代は岡本為竹・法眼受慶で父は宗受であり半井驢庵の門人。第二代岡本為竹法眼瑞宝・黙真は驢庵の子の仲庵の子息で岡本氏の養子となったが、後に半井と改める。三代は半井為竹・知庵。四代は半井為竹・黙真。五代は半井瑞庵。六代は半井仲庵。七代は半井林庵・仲庵・道泉で彦と称する人である。八代は半井玄貞・仲庵・緝で養子であり、九代は半井元冲・仲庵・保と代々名医であった。

ここでは半井林庵・仲庵・道泉・彦の項のみを附記する。尚先哲叢談にみえる臓覧の半井伯玄と半井彦・道泉との関係については、今回も知ることはできなかった。

一、高百五拾石五人扶持 半井林庵

右同日家督無相違如此被下表御医師被仰付（註）

安永三年十二月 仲庵卜改

同四年十月廿五日 奥御医師被仰付

同五年十二月 道泉卜改名

同七年閏七月七日 奥御医師御免被成表御医師被仰

付

天明元丑正月十五日 奥御医師被仰付

同三年卯十二月五日 若殿様附御七医被仰付

寛政八辰二月廿五日註中 定姫様附同様被仰付

文化八未閏二月廿五日 年寄ニ付隠居被仰付

(註) 右同日は安永元辰六月十四日

参考文献

明治前日本解剖学史・济世館小史・福井県医学史

最後に種々御教示賜った県立図書館船沢茂樹先生にお礼を申し上げます。

(大野市)

坪井信良と福井

——佐渡家文書を中心として——

竹内真一

嘉永六年(一八五三)其身一代定江戸として福井藩に召抱えられ、其後約十年藩医として在職し、其間藩の医学学校济世館教授になり、安政三年(一八五六)三月から一年有余福井に滞留している。しかし当福井地方には、彼信良に関する文献はほとんど見当らないし、又あまり知られていない。当地方における幕末期の蘭学振興に、彼の影響が少なくないと思われるので、筆者は数年前日本医史学会関西支部例会において、「坪井信良と橋本左内」と題し、その一端を報告したが、その後富山県高岡市の佐渡家所蔵の文書を借覧し、益々その感を深くした。文書中には郷里の実父佐渡養順あるいは実兄三良に宛てた書翰が多数あり、越前と関係ありと思われるもの三十余通を通覧するに、江戸情報や時事問題を克明に送り、また動乱期藩公松平春嶽に

陪した京洛の政治情勢を通報し、更に彼周辺の幕府要人、
医人について、彼一流の直截簡明な書き方で短評を下して
いる。福井在勤中の書翰は見当らないようであるが、彼が
交流した医人の動静は、福井医学の側面史とも考えられる
ので、その一端を報告したい。

(福井市)

加賀藩医・吉田長淑の「和蘭書籍 目録」について

宗 田 一

蘭書目録は幕府や蘭癖大名の蔵書目録のほか、蘭学者個人蔵のそれも数種知られており、訳書や現存蘭書以外に散逸した輸入蘭書の実体を窺う上に欠かせない。

今回紹介する吉田長淑の蘭書目録は従来知られていなかったもので、巻頭に長淑の序文があるが年記を欠く。しかし加賀医官とあるので文化七年以降のものと考えられる。

本目録は字書・医書・天地雑書の三部に分類され、それぞれ九部、七一部、十八部の書名と註記がみられる。これらすべてが長淑の蔵書ではないが、長淑の蘭書知識の範囲が窺える。

医書の註記の訳書の年代の下限は杉田立卿「徹瘡新書」(ただし徹毒新書とし、原書をスクリクチンク徹瘡論の増補書としているのは誤記だろう。これだと大槻玄沢

「大西徹齋方」に相当する文政四年刊であるが、これ以前の訳書がすべて記されているわけではなく、長淑自身の訳書で欠けているものすらある。

長淑の訳書では①ホクサム熱病論（脱稿・泰西熱病論）、②レメイ・ドロゲレイン（未脱稿、蘭薬鏡原）があげられているが、①は文化十一年刊七卷、②は文政三年刊行開始三卷で未完に終わったもので、②の訳の前身「遠西薬圃綱目」、「和蘭薬撰」の名がないのは未定稿でしかも書名が改められたためであろうが、ポイセン内科書にも自訳にはふれていない。これは刊本の「泰西熱病論」に予カ訳スル所ノ斐称（斐仙）カ五診精要」とあり、倉持成徳訳「泰西五診精要」の写本で伝わっていて倉持家養子時代の訳であるから当然註記していてもよいはずである。

さらにアポテーキにも宇田川榛齋訳和蘭局方をあげ自訳をあげていない。長淑訳には「和蘭薬局方鑑」があり、これは吉田姓だから文化六年以降の訳か。

なお、本目録では橋本宗吉訳「三方法典」の原書名をリソ内科書としているので、本書をいわゆる局方の書とはみていないことが窺われる。

（大阪大学医学部）

アルブレヒト・フォン・ローレツ とその顕微鏡学講義録

藤野 恒三郎

アルベルト・フォン・ローレツと誤記されてきたが、正しくは Albrecht von Reichen であると山形の佐々木仁一氏がオーストリアで確認してきて発表している。このローレツの講義内容に関する研究発表の中に、顕微鏡学に関するものは、まだ、報告されていないと思われるので、ここに発表する。蒲原宏氏の援助によって、ローレツ講述・顕微鏡学の筆写本を詳細に検討する幸運に恵れた。

本文一七四頁、多数の附図がある美本。顕微鏡の最大拡大率は、五・六百倍である、水浸レンズの話は出ているが、油浸レンズにまでは及んでいない。

レンズの下の物体を一定温度に保つ装置と電流を通す装置を解説し、染色液としてカルミン・ヘマトキシリンなどをあげている。細菌の話は出てないが、アメーバの運動を説明している。

（大阪大学名誉教授）

江戸時代京都における

医家門人帳について(二)

杉立義一

関西支部講演会において(昭和五十年十一月十六日)賀川門籍について報告したが、今回は養寿院玄沖門人録と百々家門人名籍についての若干の知見をのべる。

一、養寿院玄沖門人録は天明二年より天保五年の間に二〇一名の入門者があった。これを出身地方別にみると近畿七九名、中国四五名、四国二一名、九州一二名、中部二七名、関東三名、東北一四名である。また藩医と明記してあるもの五八名、医師の子弟五九名である。

二、百々家門人名籍は文化八年より明治十年までの間に三九八名の入門者があり出身地方別にみると近畿一三四名、中国六九名、四国五〇名、九州一七名、中部一〇六名、関東九名である。このうち藩医一七二名、医家子弟等五五名である。

三、すでに発表されている啓迪院門人帳、小森桃塙門人帳、賀川門籍を加えて、これら五つの医家門人帳に記載されている入門者の出身地を地方別に比較すると次表の如くなる。

院名	地方							
	総数	近畿	中国	四国	九州	中部	関東	東北
啓迪院	266人	27.0%	20.6	6.0	14.6	21.4	4.5	6.0
賀川	950	28.1	22.2	7.7	8.6	22.2	3.4	7.8
養寿院	201	39.3	22.3	10.4	5.9	13.4	1.4	6.9
小森	324	42.5	13.2	7.4	8.6	23.1	1.5	3.7
百々	398	33.6	17.3	12.5	4.2	26.6	2.2	2.7
平均	計 2,139	34.1	19.1	8.8	8.3	21.3	2.6	5.4

この表により次のことが結論できる。

イ 近畿地方が最も多いのは当然である。

ロ 中国地方と中部地方は平均二〇％。

ハ 四国地方と九州地方は平均八％。

ニ 関東地方と東北地方は共に少ないが東北の方が関東より約二倍である。

ホ 啓迪院と賀川はほぼ同じ傾向を示す。

ヘ 江戸時代京都に遊学した医家門人の出身地を地方別に分類すると一定の類型がみとめられる。

(京都市)

「瘍医新書」の研究(第一報)

大鳥 蘭三郎

ドイツの十八世紀の外科医 Lorenz Heister(1683~1758)の著書“Chirurgie”は一七一八年に初版が刊行されてから九版も版を重ね、また数カ国語に翻訳された程広く読まれた本であった。そのオランダ語訳本は“*Heekundige Onderwijzingen*”と題し、オランダの Hendrik Ulhoorn が蘭訳し、江戸時代後期に日本へ伝来された。そのうちの一本が杉田玄白の手に入り、玄白は早速この本の訳述を始めたが、多忙のためこれに専念することができず、高弟の大槻玄沢にその業の完遂を委嘱したという。その結果、でき上ったのが『瘍医新書』と題する四冊本で、文政八年(一八二五)に出版された。

このような来歴を持つ『瘍医新書』は西洋外科書の真の意味での訳述書として日本で出版された最初のものである

といえるが、僅々四冊に分れているにすぎない『瘍医新書』があの龐大なハイステルの原書を全部訳述したものはとても思えない。

この点につき、先年、すこし、調査、研究したが、内容的にあまり深いものではなかった。今回はできるだけ細かい調査を行い一層精確な研究を報告したい。

(東海大学)

湯治と薬師信仰

中 沢 修

わが国の湯治の歴史については、西川義方氏の詳細な研究があり、特に由緒ある全国の温泉についてはそれぞれその故事来歴まで伝えられている。その内でも薬師如来の多ちびきによって始めて温泉が開かれたという例が非常に多い。湯治という言葉からも分る通り、温泉は単に体をきよめるといっただけでなく、普通の風呂にはない不思議な効果(近代医学では生物学的非特異作用と説明している)があり、積年の業病が湯治の結果全治したとか、不妊症の婦人が湯に入って子供をもうけることができたとか、科学的に説明し難い効果を体験したとき、何か神仏の靈験を感じる。のは、粗朴な庶民の感覚として当然であったと思われる。ここに現世利益、衆病悉除の薬師如来に対する信仰が結びつけられることになる。上州草津の湯、摂州有馬の湯はわが国東西の兩大関の位置を占める温泉であるが、いずれも

薬師如来のみちびき給うた温泉として語り継がれて来た。

その他道後、熱海、玉造、浅間、山中温泉等々著名なほとんどの温泉は薬師如来にゆかりのあるものばかりである。

しかし現代の日本人が温泉に対して抱く感覚は如何なものであろうか。団体温泉旅行で酒を飲んで大騒ぎしたり、新婚旅行での温泉泊りでも、その温泉の由緒も効能も知らずにすんでしまい、湯治というイメージからすっかりかけ離れてしまった。ましてや薬師如来の功德を感謝する風習はすっかり影をひそめてしまったように思われる。こうした皆さんの現代にあっても、いわゆる素朴な湯治場では薬師如来を祀りあがめながら湯治にいそむ風習が細々ながらもみられる。

上州四万温泉、薬師温泉、信州菱野温泉、別所温泉、白骨温泉、小谷温泉、中房温泉、欠ノ湯、越後の梶山新湯、蒲原温泉、飛騨の平湯温泉、蒲田温泉、紀州の竜神温泉、湯峰温泉、川湯温泉、椿温泉、越中の小川温泉等々ここ数年來訪ねた温泉湯での薬師信仰の歴史実態を報告し、更に若干の文獻的な調査も合せて報告し参考に供したい。

(岡崎市)

古経「治禪病秘要法」とそれが我 国の精神医療に及ぼした影響につ いて

泰 井 俊 三

わが国現代の精神科治療の体系はすべて欧米の医学のそれを組入れているが、古代の仏典に精神治療の途が示されていることは従来全く閑却されて来た。しかるに本経には仏陀が修行僧の乱心病を治する七二種の方法が示されているのは専門的にみて真に興味深い。

現存せる本経に示された治療法は一九種であるが、これを整理すれば五の部類となる。

- 一、乱声、悪名、利養、内風、外風に基づく発狂の治療
- 二、地・水・火・風の観想の逸脱に基づく発狂の治療
- 三、四大の失調に基づく心身症の治療
- 四、邪淫・犯戒・歌唱狂の治療
- 五、鬼魅に基づく発狂の治療

これ等の療法に共通しているのは、その方法が凡て内視・瞑想であることである。仏教の伝来と共にわが国に伝えられたこの内観法が、中世より近世にいたるまでいわゆる僧医によって施行され、それが仏法の力による狂者の治癒例として文献に続々とあらわれている。更にそれは明治期より現代にいたるまで、姿や形をかえて脈々として伝えられ、広くみれば東洋の人生観の基潮をすら形成するの観がある。その源流を本経の趣旨にさぐるうとする。

(大阪・北野病院神経精神科)

弥勒ボサツ下生経と治病信仰

関根正雄

日本の治病信仰では、対象となる仏尊の数はきわめて多い。寺院仏堂の数からみて観音ボサツ・アマタ如来・薬師如来・地藏ボサツ・不動明王などは代表的仏尊である。ミロクボサツの信仰は古代に隆盛し、その治病信仰では中世以向にあって形態をかえて、大部分が間接的信仰になっている。これは他の仏尊の場合といささか異なるところである。

ミロク信仰の所依とする經典は、ミロク六部経である。その第一の『観弥勒菩薩トソツ天上生経』では、このボサツはトソツ天に上生して、そこで五六億年間をボサツ道の行道に過し、そのあとトソツ天からエンブ提の人間世界に下生してくる。それ故に人民(にんみん)は「繫念念仏形像、称ミクロ名」するならば、命終のあとトソツ天に往生

できてミロクと共棲し、さらにミロク下生に従って再び人間世界に生じることができるとする。

『ミロク下生経』『ミロク成仏経』によれば、ミロクはシヤカと全く同じプロセスで人間世界のバラモン家に生れでて、シヤカと同じ無上道果を成して仏尊となる。ミロクの生れでるときは国土は、極めて平和豊饒の土地で「無有疾苦常安樂」であるとされる。ただそこには「唯有三病、一便利二飲食三衰死」の問題がある。それで下生の意義は、人間に「不能免三悪、妻子財産所不救、世間無常命難久保」であることを教え、梵行をすすめてそれによる人民の濟度を目的とする。他の經典が治病をもって濟度の善巧方便としているのに、ミロクでは一般の病氣を治してやるとはひとこともいっていない。

ミロク下生信仰の前提は、下生の土地が極めていい国土であるというのである。これを宮田登氏らはメシア思想だと指摘する。それでミロク信仰にはその布教を分担する鹿島信仰のなかで、疫病神を地域から追放する行事があり、現在でもそこにミロク踊やミロク唄が残る。疫病の追放は、生産の減少をくい止めるから国土豊饒の条件のひとつ

である。

ミロクの治病は修験道のなかに導入されている。『下生経』では、賢者大迦葉をえらび「ミロク当説三乗之教加我今日、弟子之中大迦葉者行十二頭陀……此人当佐ミロク勸化人民」とあつて、迦葉の梵行を人民の hands とすることをのべ、ミロクはわざわざ、山上に住いする迦葉の居所を訪問したとする。それで役小角が迦葉ミロクを信奉したことは、大和当麻寺・和泉施福寺などの事蹟に残る。

さらに弘法信仰では、宗祖の入定思想から発展し、そこに数多い治病信仰がある。その空海は「御遺告」のなかでミロクに従いて下生することを約束し、「五十六億余之後必慈尊御共下生祇候、可問吾先跡」とのべ、その治病信仰が結合している。

ミロクへの治病希求は、かように間接的の拡大が多いが直接的のものも少数に存在する。現在、北関東・近畿地方などにいくつかの事例をみるが、すべて民間信仰の発想の度合いが強い。

(太田病院・太田市)

唐く清間における「医師」の官 より見た医者の地位について

山 本 徳 子

わが国において、医者に対して用いられている「医師」なる名称は、中国の医官に由来するものであり、その制度的起源は、『周礼』における記載によって知られている。唐代においても、医官としての医師は見られるのであるが、「医師」の名称はそのままであっても、地位については変化がみうけられる。すなわち、かつては衆医の長として医の政令を掌るものであったが、唐代に至っては、治療担当者兼医生を教える補助者になっていた。宋代になると、その複雑な政局に伴う官制の変化とともに、医師なる官もまた影響を受けているように解せられる。現今の中国においては、また、医生、医士の名称が用いられているようであるが、明・清のころに、医官として医士・医生がみ

られるのである。

名称なるものは、時代および当時の状況によって変化するものでもあらうが、また、その時期の状態の一面を現すものではなからうか、とも考えられる。実態についてのこともさることながら、まず、制度上における医官のことを把握したいものと考え、一例として、「医師」なる官を通じて、唐代以後の医者の地位について考察したい。

(大阪大学教養部)

日本古代医療官人の 出自について

新 村 拓

内薬司官人はほぼ典藥寮よりの出向官人によって構成されていたが、両官司に勤務する官人の出身の多くは百濟・新羅・倭漢氏系の帰化人であつて、八世紀の段階においては補任氏族の約七〇%が彼らによつて占められている。その他の氏族については物部、平群、大神といった大化前代以来の中軸的な氏族の進出がわずかにみられるが、多くは卑門出自の外階コースを歩む氏族であつて、本官を最後に致任しており、両官司とも政界とは無縁なところであつたといえる。医官については寮内教育によつて養成することになつてゐるが、それには帰化人の一部が薬部として身分的に固定されて世襲的に技術の習得をはからせるというタテマエになつてゐたが、他方で広く有能な庶人を求めて底

辺の拡大をはかつてゐる。ところで医官の多くを占めた帰化系出身の者たちのほとんどは平安初期において文官へ転身するなどによつて姿を消し、いわゆる家業を形成するに至らず、また薬部としての伝統のないものが医術を解し、それによつて出身する自学習の者の多くも個人的な進出に終始し、氏族としての進出をみなかったため同じく世襲的な地位を得るに至っていない。少なくとも九世紀までをながめてみると、当官司は卑姓の者たちが独自の技能によつて立身することのできたところであり、地方豪族層の子弟が京へ入貫し、中央の官界へ進出する道を拓くひとつの窓口になりえたと思われる。十世紀後半、摂関体制の確立に併行して当官においても特定氏族による世襲化がみられるようになるが、それは諸官衛の縮少、給与の欠配等の不安定な生活を強いられた中下級官人が生存のために家業化を推進する一方で、その地位の安定化のために権門勢家との間に私的な関係を結んだことによる。それには医術という専門性と、人格的なふれ合いの中で事が運ばれるという医療行為の特殊性がそうした動きに有利に働いたといえる。そうした状況の中で丹波・和氣両家の医界における覇権争

いは治療の場において、補任叙位の時において行なわれたが、結局は丹波氏の優位に終わっている。寮四等官の性格について概略すれば、典薬頭は八世紀半ばまでと十世紀以後は医業人の任官であるが、中間は非医業人の任官となっており、典薬助においてはほとんどが非医業であり事務官であったと思われる。藤原・源氏という政界における中樞的な氏族がほぼ世襲的に補任している。允、属はほぼ医業の人であり、内部昇進による任官であった。

(神奈川県立津久井高等学校)

医学の文芸化について

三 木 栄

われわれが多岐難解な学問を必要に迫られ覚え易くしようとする時には、それをでき得る限り簡単な一定の形式にまとめ、図にしたり表にしたり、また縮めて短い文字に列べたりする。しかもさらに調子を整え誦し易くしこれに情感をも持たせようとする。現代の変転めまぐるしい学問では、簡条的な図表の範囲に止まっているが、むかしは、詩や賦や歌、戯曲などを以て滋味豊かに、これが作り為されたのである。形而上の学ではこれは一般化され、それ自体のものもあるが、このようなことが形而下の科学の分野にまで及んで、殊に医学は特別の科学であり病氣治療を目的とし、芸術性を必要とするゆえ、これの文芸化は他の科学的学問より豊富に見られるのである。漢字文化圏においては、文字の遊芸化が容易であり、伝統医学が二十世紀にな

っても温存されているためもあって、この医学の文芸的作品

品が多く伝存している。西欧でも存在するが（『医学詩のたぐい』
第三編Ⅻに、例を掲げる）、われわれのように色とりどりでないようである。

私はこれを医学の文芸化—文芸医学と名付け、二十数年來時にふれ親しんでいる。医史・病症・診断・治療・藥物・鍼灸・養生などにおいては、独立化した小学問と認められるほどに進歩しているものもある。本席ではこれらのうち若干を拾い、資料を示しつつ解説しようと思う。

△千字文（一句四字二五〇） 南朝の梁代の原典に準じて各種各様の「千字文」がたくさん作られたが、医学の面では、日本では鎌倉時代の惟宗時俊の『医家千字文註』があり、この註解は医学史上価値が高い。江戸後期に『医経千字文』なるものも作られた。

△三字経（三字を一句として編む） 著名なのは清の陳念祖の『医学三字経』で、冒頭にある「医学源流」は中国医学史を見事に説き、次いで全病症を二十三に分けて解く。この書の後に「統編」も多く出されている。その他、三言の形にされたものに『針灸三字経』『外科三字経』、温病、痢症、女科、臟腑経絡、脈法、薬性などの三字訣のたぐいがあり枚挙に

いとまがない。

△四字（これは一番多い。薬品の性味効能を語る『薬性歌』のたぐいは四字四句で綴られ、明代に出現し親しまれ、朝鮮では特異に発達して薬性歌本草学なるものを形成するまでに至った。日本でも行なわれ、『和蘭薬性歌』のような異彩ある書も併び現われた。『脈経』を簡単にした「脈訣」は、宋代から生まれ盛行した、これは大体四字で綴られている。）

△詩（カラウタ） 賦（オクノテ） 訣（シメククリ） 括（節ラツケウタウ） 歌（ツイク） V、五言のものもあるが七言の形式が多い。経絡、脈法、湯方、薬性、傷寒論、針灸などについて、歌訣・歌括・歌賦と称する書が多々ある。

△和歌V、江戸初期から『和歌食物本草』『飲食狂歌合』『養生閨門歌』があり、「脈訣」の和歌化、『医道百首』のたぐいもある。

△謡曲V、江戸前期に『十四経脈論』などの謡曲が作られている。

（堺市）

佐々木中沢と大槻玄沢

山形 敏一

再び「安産仙翁邦言教諭」について
付、五十嵐汝水の生涯

佐々木中沢は蘭学界の先達であり、同郷の先輩でもある大槻玄沢に入門し、その高弟として活躍していたことはこれまででも知られていたことである。すなわち、中沢は寛政

玉手英典

二年一関に生れ、一関藩医建部清庵由水に学び、文化十二年二十五歳のとき江戸に出て大槻玄沢に学び、また、桂川甫賢や馬場佐十郎にも従学した。中沢は江戸に遊学している間に玄沢の瘍医新書の校訂を行ない、また八刺精要の重訳に従事し、さらに瘍医精選の翻譯を完成していた。

仙台藩医学校初代号頭渡辺道可の依頼により、桂川甫賢の推薦を受けて仙台藩医学校外科教授として文政五年三月仙台に着任したが、在職中も大槻玄沢と文通を重ね、その助力を得て、医学校の蘭科拡充のためいろいろ画策した。

私は最近入手した玄沢と中沢の往復書翰を検討したところ、その師弟関係は従来考えられていたものよりさらに緊密なものであることが明らかになった。(東北大学医学部)

表題について前回報告した処であるが、その内容の詳細につき更に調査したので再び報告する。

表題の版本の版木は昨年四月廿八日の火災によりその大半を焼失し僅かに三枚が残った次第であるが、幸に一部だけ版したものが残されていたので、この版本と慶応大学医学部情報センターに収蔵されている初版本とにより調査した。

内容については次の区分ができるのでその区分に従って述べる。

一、妊娠中の心得と安産をなす方法

特に日常生活の態度や仕事の事などにつき農作業と家庭内の仕事を例にとり教示し腹帯の罪惡面を強張してい

る。又栄養上から食品の選択につきのべ、従来の迷信にとらわれざるよう注意している。

二、出産に際し、予測し得る場合の異常例について例を挙げて詳述し、特に地方弁を用いて軽妙適切な表現を以て示している。

三、又異常出産の対応策については、直ちに処置すべき初療に關し、微に入り細に汎って説明し、その方法は従来の漢方医的なのが多いが、局所の湿布、巻法、洗浄等の方法も述べている。

四、多くの処方が記述してあり、一般産婦に対する指導よりも専門的な所が多いのは当時産婆と称し、実際に出産を介助した女性たち「とりあげばあ」に対する指導と見られる。また産科医に対しても教科書の価値が認められる。

五、薬品名も漢方薬のみならず、西洋医によりもたらされた新しい薬品も含まれている。その内、麻薬や劇毒薬と後年規定された薬品名は、五十嵐版木には削除されている。後ってこの五十嵐版は明治廿年以降に彫刻されたものと考えられる。

六、妊産婦、並出産婦の心得、栄養等の指導も実に詳細に記述されていて余す所がない。古来の迷信や陋習については明確にその非をのべて之を排し、現代医学や栄養学上からも肯定し得る指導を行なっている。

七、特に出産時の異常に対しては産婦の状態から予測されるものを挙げて示しているが優れた観察力と老練な産科技術を駆使して救急応急的初療処置を詳述している。仍ち母と子の生命を守ることに徹底した指導というべきであらう。是等の診断や施術のあるものは現代医学にも十分応えられる程度のものが認められる。

特に出血や失神等の重篤、かつ突発的な異常に対する救急処置については、その初期の症状から、余後にいたるまでを細々と記して注意を促しているが、当時このような原因で死亡しまたは産後疾病にかかる産婦が多かったと思われる。

八、更に産褥に關して、部屋の選定から産婦の服装や寝具についても色々指し、できるだけ良好な環境で出産するように配慮し、出産後の回復期の衛生保健についても注意すべきものを教示し、特に産褥熱の予防につき言

及している。

九、しかしこれらの診断や処置も素人である「とりあげばばあ」等の家族や手伝いの女達には相当難かしい事柄が多く、またすべて教えることはできないとも述べ、濫りに処置を施すことのないように戒めている。

以上の如く具体的に記述された本版本の内容は、同時代に世に行われていた他の産科的指導書である平野元良の産婆順知、蛭田玄仙の口述書、賀川子玄の産論、等と比べて見ると、多くの一致点を見出すことができる。特に平野元良の出版本はその体裁といい、記述内容のいう、ほとんど同一のものが多い事が判明した。本版本の著者である五十嵐汝水は、恐らくこれら先哲の著書を研究し、それに自己の経験を加へ、更に理解し易い地方弁を巧に利用して独特の漢文調の文章に、ルビを方言で附した文体を考え出したものと思う。

五十嵐汝水は生れは名古屋方面であつて修験者として奥州に旅行し、遂に伊達領高野藩の内田村平沢の一堂祠に落付いて布教していた。彼が何時何人より産科の知識と技術を学んだかは不明であるが、沢山の書籍を買い求めて所持

し読書がすぎであつたという点から見て、前記の産科の医書を読んで興味を持ち初めたのではあるまいか。彼の生涯と家系につき、前回報告後に調査判明した事項につき追加したい。

尚復刻については版本所有者五十嵐宏一氏の不慮の死と版木の大半の焼失に遇い、途絶していることは残念でならないと共に前回の発言が実現し得なかつたことに関し申訳ない次第である。

(仙台医学史研究会)

Hermann Lebert (1813—1878):

Handboek d. Praktische Geneeskunde. Groningen, 1861—1863.

とその訳書 (坪井芳洲訳述『医療新書』

一八六八、及び『列別兒篤氏・窒扶斯

病論』、一八七九) ならびにその意義

(最初の病理解剖を基盤として臨床学の

受容)

阿知波 五郎

Hermann Lebert の本は、病理解剖を基盤として書かれ

た内科書の最初のグループの一つとして、わが国に受容

(幕末から明治初年) された。

1、H. Lebert 本の原著

当時輸入された蘭訳本の序言などから、原著は次のとおりである。

Handbuch der praktischen Medizin, 2 Bde., Tübingen, 1855, 1856.

1、H. Lebert 本の蘭訳書

Handboek d. praktische Geneeskunde. uit het Hoogd. vert.

door Dr. A. Drielsma. Eerste deel (1861), Tweede deel

(1861), Derde deel (1862), Vierde deel (1863), Gronin-

gen (J.B. Wolters).

演者の使った蘭訳本は「長崎医学校図書之印」の蔵書印

のある華浦医学校旧蔵本である。ほかに同じ題名の W. J.

Thieme & Co. 版 (1872), 4 dln. がある。

三、和訳書

a 『医療新書』

独逸・歐羅巴、列國醫術原撰、東京・坪井(訳)芳洲(爲善)重訳

慶応二年 (一

八六八)、四冊

本書は英蘭堂・嶋村屋利助の発兌で同書の奥付には「全

三〇冊」とあるが、四冊以外は未刊で終った。

b 『列別兒篤氏窒扶斯病論』

普魯士・列別兒篤氏、高知病院長・高橋正直訳、高橋正純(訳者の兄)

関一朗校、明治十二年 (一八七九) 刊、二冊

訳者の緒言の中で「普魯士ノ大医・列別兒篤氏ノ病理書

中ニ就キ」とある。したがって、Lebert の *Handbuch der*

Allgemeinen Pathologie und Therapie. 1855. そしてその蘭訳

書 *Handboek der Algemeene Pathologie en Therapie*. Uit het

Hoogd. vert. door K. J. van Deyl. Amsterdam (G.

Koster), 1865—1868. から採つたものかもしれない。

このことについては叙にも触れていない。ただ訳文と一、の蘭訳書と比較して、恐らく一、の蘭訳書によつたものであらうと推測するにとどめる。『医療新書』の方の原典(蘭訳書)は、和訳書の序言に、蘭訳者・度律斯麻(A. Diehna)と明記があり、その刊行年も一致しているので、前述どおりであることに誤りはない。

四、Lebert 本の意義

さきに演者は、明治前の洋(医)学受容については①ライデン学統医学受容期(一七五〇～一八五〇)、②生氣(機)論医学受容期(一八二〇～一八五五)、さらに③病理解剖を基盤とする医学受容期(一八六八～一八八〇)の三期に分けて考えることがよいと提案した。その第三期の代表的意義は重大である。

(京都市)

宇田川榕菴の著書に見られる呼吸及び酸素に関する記載

矢部 一郎

新しい元素概念による酸素呼吸の理解はラボアジエに始まる。酸素呼吸及び血液のガス交換に関する西欧における知見が、宇田川榕菴により校補あるいは著作された諸書『苦多尼訶経』(一八二二)、『新訂増補和蘭薬鏡』(一八三〇)、『遠西医方名物考及同補遺』(一八二一～一八三四)、『植学啓原』(一八三四)、『舍密開宗』(一八三七～一八三九)にどのように記載されているかを調べて見た。

『苦多尼訶経』、『新訂増補和蘭薬鏡』では酸素呼吸に関する記載は認められない。『植学啓原』では、卷之一「資養の料」、「氣孔」、卷之三「遠近の成分」で酸素および植物のガス代謝の記述がある。このことはすでに報告している(科学史研究、一〇四号、一九七二)。ちなみに、植物

の呼吸によるガス交換が証明され、呼吸が動植物共通の現象と見られるようになったのは一八五〇年である。

『遠西医方名物考補遺』巻七元素編第一では、温素、光素、瓦斯^{ガス}、酸素、巻八元素編第二では、窒素、水素、炭酸、巻九元素編第三では、大気、排気鐘図説において酸素呼吸の解説がなされている。

『舎密開宗』では、初編巻二第三十一章、第三十二章、第三十三章、第三十四章、第三十五章、第三十七章、第四十章、第四十八章、巻三第六十七章、第六十八章、第七十章に酸素および酸素呼吸の記載がある。特に、第三十五章、三十七、四十、六十七、六十八、七十一章は酸素呼吸について述べている。

両書の記述は、動物が大気中の酸素をとり込み、窒素はそのまま呼吸として出し、酸素が静脈血に溶けると鮮紅色の動脈血になること、酸素の一部は体内で炭素と結合して炭酸瓦斯となり、呼吸に含まれて排出されること、炭酸瓦斯が動物の呼吸に害があること、窒素瓦斯が動物の呼吸に害があるというのは酸素の欠乏が真因であること、窒素瓦斯が植物に有害であることなど、ほぼ類似共通している。

両書の記述内容の共通性は両書の執筆時期が同じ頃であったことを示している。記述内容は『遠西医方名物考補遺』の方が詳細にわたる。これはこの書が医者のための薬物書であったこと、『舎密開宗』は化学書として、他項目との関係もあり、整理されて記載されたことによると思われる。とりわけ、『遠西医方名物考補遺』における元素および動物の酸素呼吸に関する詳しい記載は、本邦で最初のものであることと共に注目すべきことである。

(武蔵大学生物学教室)

京都療病院におけるヨンケル

大森治豊先生のスライド

大矢 全 節

宇留野 勝 弥

京都療病院は明治五年壬申（一八七二）、今から約一〇
四年前に、現在の東山円山公園付近、粟田口に創設され、
ドイツ医師ヨンケルおよびレーマンを招いて教師としてド
イツ医学を講義せしめた。

ヨンケルの処方ならびに諸説は開院後約二年の明治七甲
戌年十一月医学生原元良が通弁司山田某を介して筆記した
写本の「療病院治療則」と題して、今に伝えられている。

京都療病院は現在の京都府立医科大学の前身で、明治二
己巳年一八六九、相良知安、岩佐純等の米人フルベツキの
忠言を聴いてドイツに範をとることが決定してからドイツ
医学が京都の療病院に導入された記録として大切な資料と
考えられる。

九大初代学長大森治豊先生の伝記を著述したのは昭和三
十六年八月であった。伝記の資料を全国から拾集していた
とき、好運にも先生の直孫大森晴夫博士よりアルバムを贈
呈された。私は非常に貴重な多くの写真を入手したのでよ
ろこび、四十二駒のスライドに製作した。そのスライドの
若干をお目にかける。

（山市）

（枚方市）

邦訳「解体生理図説」とその原著者
維廉杜児寧児（ウイリアム・ターナー）について

蒲原宏

ウイリアム・ウイルスが東大で講義をした解剖生理学の原著は、主としてウイリアム・ターナー(William Turner)の Atlas of human Anatomy & Physiology 1857, Edinburgh によつたものである。

佐々木東洋は明治六年この原著を翻譯して、「維廉杜児寧児原著、解体生理図説」四巻として杏雲堂蔵版として島村鼎甫の校閲をへて出版している。

維廉杜児寧児は Sir William Turner (1832~1916) のことであり、一八三二年一月七日イングランドのランカスター (Lancaster) に生れ、ロンドンの St. Bartholomew Hospital で勉強し、一八五三年に R.C.S. のメンバーとな

った。

一八五四年エヂンバラ大学の解剖学の Professor となり、のち同大学の解剖学教授となった。

ウイルスがエヂンバラ大学在学中に親しく教えを受けた先生でもあり、「解体生理図説」の原著 Atlas of human Anatomy & Physiology は一八五七年エヂンバラで出版されたものであり、一八五九年にウイルスはエヂンバラ大学を卒業したときには入手できていたものであった。

ターナーは解剖学者であるとともに有能なアドミニストレーターであり、一九〇年から十三年間エヂンバラ大学医学部におけるイングランド出身の最初の医学監督官の役を務めている。

一九一六年二月十五日エヂンバラで七四歳で没しているが、その業績について述べ、「解体生理図説」が明治初期の日本医学教育とのかかわり合いについて言及したい。

(新潟ガンセンター)

指紋法の創始をめぐって

長門谷 洋 治

指紋についての認識は東洋では早くからあり、西洋でも知られていたが、個人識別に指紋が有用であることが見出だされ、これが実際に応用されるようになったのは十九世紀も末近くであった。指紋法について最初の発表をなしたのは来日宣教医の英人 Henry Faulds (一八四四—一九三〇) で、Nature 一八八〇年十月二十八日号に登載された。「手の皮膚のしわについて On the Skin-furrows of the Hand」と題したその小論は、「日本で発見された前史時代の陶器の標本を吟味している間に、粘土がまだ柔らかいうちにつけられたある指跡の特徴に、私は約一年前注意を払うようになりました」という書き出しであるが、これは Edward S. Morse 発見になる大森貝塚より出土の縄文式土器によったものであった。彼はこの文の中で猿の指紋、

人間(日本人、外国人)の指紋、指紋のとり方(インキの使用)、法医学的応用(犯罪者の身元の証明)さらに人類的、遺伝学的応用にまで言及している。

この論文がでて僅か一カ月後の同誌(十一月二十五日号)にかつてインド・ベンガル州の官吏であり、当時オックスフォード在の英人 William J. Henschel が「手の皮膚のしわ、Skin Furrows of the Hand」なる小論を寄せた。

本論文は題名もよく似ており、その最初につきのごとく記されている。「あなたの日本の寄稿者の行なわれた興味深い研究を助成するために、私の所有する情報を寄稿することをお許し下さい。もう二十年以上も私は指跡の方法で署名をとってきました。そしてインドでは数種のやり方で、実際の目的のためにこれを紹介し、著しい貢献をしました」以下、彼は指紋を実際の行政に使用したこと、指紋が二十年前のそれと変わっていなかったことの発見などについて述べている。これらより指紋法の存在に気付き、これを実際に使用したことでは Henschel が先んじていたと考えられるが、これを雑誌に公表したことでは明らかに Faulds が先である。しかし、その後二人の母国である英国では

Herschel の方に指紋法創始の優位性を認めるものが多い。

これは指紋法を体系づけて大成した英人博物学者 Francis Galton がその著述などで、Faulds についてはどういうわけか正確に評価しなかったことによるところが大きいと考える。Faulds は終生、自分の priority を主張し続けたがとりあげられなかった。最近日本、英国の一部で Faulds の再認識が行なわれ、彼の名誉は回復されつつある。

(日生病院・皮膚科)

アメリカ合衆国の独立二〇〇年と 医師ベンジャミン・ラッシュ

古川 明

アメリカの植民地一三州が、合衆国として独立したのは一七七六年であるから、一九七六年はその二〇〇年にあたる。独立宣言の署名人のなかに医師が五名おり、そのうちベンジャミン・ラッシュ Benjamin Rush (一七四五—一八一三) が、すぐれた医師として、その名を後世にのこした。日本では、一九七四年を洋学二〇〇年の年として、杉田玄白らの苦勞を偲んだが、アメリカでは、ほとんど時を同じくして、ヨーロッパ医学から自国の医学を独立させたラッシュの、二〇〇年前の偉業を偲んでいる。

アメリカ合衆国独立宣言の会議の状況は、後年歴史画家トランバル John Trumbull が「独立宣言の署名者たち」の題で描き、その作品は現在ユール大学の美術館に所蔵さ

れている。この画は一八六九年と一八七五年発行の独立宣言記念切手の原画に選ばれたが、そのなかにラッシュェら医師が描かれているので、世界ではじめて医師が登場した切手として、医学切手第一号となった。演者はこの独立宣言切手を中心に、ラッシュェの業績について書いたことがあるが、その後調査した事項を追加して、日本ではあまり知られていないその伝を報告したいと思う。

わが国ではラッシュェについて、阿知波五郎博士らの記載があるが、一般によく知られていない。最近本会の例会で、カリフォルニア大学のヴェイト教授 Ilza Veith が、ラッシュェについて詳しい講演を行なった。またラッシュェの業績に対する世界各国の批判については、故シュライオック教授 Shryock, R.H. の一九七一年の報告がある。

ラッシュェは一七六九年に、エジンバラ大学留学から帰国して、フィラデルフィア大学の初代の化学の教授となり、一七八九年に臨床医学の教授に転じた。この大学は一七九一年に、ペンシルベニア大学となったが、彼は医師として、一七八三年から死去するまで、ペンシルベニア病院に籍をおいた。ラッシュェが医師として能力を発揮したのは、

一七九三〜四年のフィラデルフィアにおける、黄熱の流行時の活躍で、その記録は自著として残されている。瀉血と下剤という彼の治療法では、効果がなかったであろうが、多くの医師が逃げ出したのに、流行の終るまで現地に止まって診療を続けたことは、高く評価されてよい。また彼はすぐれた精神科学者で、その方面の著書は約七〇〇年もの間、教科書として用いられたという。

(篠原病院・東京都)

明治二十年代の順天堂に

おける手術

酒井 シヅ 鈴木 滋子

明治八年、佐藤進がドイツ留学から帰国して以来、順天堂は日本の代表的外科病院として、現在までその位置を保持している。進が日本ではじめて行った手術は少なくないが、なかでも全造鼻術や植皮術は異色のものである。⁽¹⁾

しかし、腹腔外科は進の留学中にドイツで緒についた分野であったためか、進によって行なわれたのは卵巣摘出手術に限られた。胃腸外科が順天堂で本格的に行なわれるようになったのは明治三十三年、佐藤達次郎がドイツから帰国してからである。

卵巣摘出手術は、副院長佐藤恒久が明治二十四年、ドイツから帰国したのち一層盛んに行なわれるようになったが、明治三十年十一月まで四十八例⁽²⁾であり、当時、患

者側に手術へのためらいがあったことがうかがえる。

四十八例中の死亡は三例で、その中の一例は腹壁に撒布したヨードホルム中毒の結果であった。

今回は明治二十年代の順天堂における手術の動向と患者の対処の仕方を順天堂医事研究会雑誌に載る記録をもとに調査した結果を報告する。

手術の例数は年と共に増え、その結果、はじめ日曜を手術日にしていたのを、明治二十七年から一、六の日に改め、明治三十年からは偶数日の隔日に行なった。

手術の対象となった疾患は痔疾が圧倒的に多い。男女の割合は男性がはるかに多いが、年とともに女性がふえた。とくに泌尿器系は女性がきわめて少ない。羞恥心から診療を受けられなかった事情を反映している。

麻酔は全身麻酔にクロロホルムの単独使用。局所麻酔にコカインを使用した⁽³⁾が、コカインがすぐれた局所麻酔剤であることを明治二十年に進が報告している。

消毒は石鹼水、昇汞水、石炭酸水の併用であった。大手術ではとくに止血、消毒に厳重な注意を払っている。

文献

- (1) 佐藤 進 外科手術示要及び成形手術、順天堂医事研究会雑誌、十三号、明治20年
- (2) 佐藤恒久 過去一ケ年間順天堂に於て施したる外科手術に就て、順天堂医事研究会雑誌、二六六号、明治31年
- (3) 佐藤 進 コカイン將に格魯兒保兒母に代らんとす、順天堂医事研究会雑誌、二一号、明治20年

(順天堂大学)

大正期学校衛生史の研究(一)

北 豊吉

杉 浦 守 邦

大正中期から昭和初期にかけて、文部省学校衛生行政の中樞にあり、新しいセンスと卓越した行政手腕によって、わが国学校衛生の再興発展をなした北豊吉は、明治八年十月三十日石川県石川郡旭村(現金沢市)で生れた。

明治三十年第四高等学校医学部を卒業後、帝国大学医科大学衛生学教室緒方正規教授の下で衛生学を専攻した後、明治三十五年ドイツに留学した。ライプチヒ大学フランツ・ホフマンの門に入り、ドクトルの学位を得た。明治三十七年日露戦争にあたり召集をうけて帰国、広島陸軍検査所に勤務した(陸軍二等軍医)。明治三十九年大阪市衛生研究所創設に伴い初代所長に抜擢された。

大正五年七月選ばれて、折柄文部省に新設された学校衛生官に転じた。彼の最初に手がけた仕事は、明治三十年代

三島通良によつて制定された学校衛生関係法規が、すでに古く時勢に合わなくなつてゐるのを改正することだった。彼の就任と前後して設置された文部大臣の諮問機関である学校衛生会の幹事として精力的に海外の学校衛生事情を調査するとともに、国内の実態を明らかにしていった。その結果は学校衛生参考資料の名で、数多く刊行され大いに啓蒙に役立つた。

当時、第一次大戦後のわが国学制改革の根本方針を審議するため特に設けられた臨時教育会議が、今後の小学校教育のあり方に関する答申の中で「児童身体ノ健全ナル発達ヲ図ルカ為ニ一層適切ナル方法ヲ講スル必要アリ」と述べるとともに「積極消極ノ二方面」から適当な方法をとることを、政府に勧告してゐた。この勧告によつてまず、大正八年六月文部省普通学務局に学校衛生を主管する第六課が設けられることとなり、北はその課長に就任した。

ここにおいて、彼は学校伝染病規程（大八・八）、児童生徒及び学生ノ近視予防ニ関スル訓令（大八・九）、学校医ノ資格及び職務ニ関スル規程（大九・二）、学生生徒児童身体検査規程（大九・七）、学校用机腰掛ノ標準ニ関ス

ル件通牒（大十・八）、女教員ノ産前産後ニ於ケル休養ニ関スル訓令（大十一・九）等の諸令規を次々と改正又は制定していった。このような実績から学校衛生課は大拡張することとなり、大正十月六日には文部大臣官房に移され四掛制となつた。

その後、帝国学校衛生会の発会と雑誌「学校衛生」の発刊、全国連合学校衛生会総会の開催、地方学校衛生職員制の実施、学校看護婦の普及、学校給食・学校診療・養護学級の勧奨等多くの事業を進めていった。

彼はまた、大正十一年九月から約一カ年にわたつて欧米を視察したが、帰朝後大いに体育運動行政に力を注いだ。体育研究所の開設、日本体育連盟の発会、さらに明治神宮体育大会の文部省移官など皆彼の努力による。ついには課名も体育課と改め（昭三・五）た。

昭和四年十月体育課長を辞任し、体育研究所長専任となつたが、七年にはそれも辞し、以後聖路加女子専門学校教育などをつとめて、十五年八月三十一日赤血球過多症によつて死去した。享年六十四歳だった。

（山形大学教育学部）

スクリーニング史の二、三駒

三輪 卓爾

医学用語としてのスクリーニング (screening) は、"the presumptive identification of unrecognized disease or defect by the application of tests, examinations, or other procedures which can be applied rapidly" (CCI, 1951) と定義されている。「疾病・異常の有無をできるだけ効率的にふるいにかける仕事」と簡単に理解しておいてよいであろう。

スクリーニングの主対象となる疾患は、その社会の医学レベルのほか、地理的・歴史的・社会的な背景に影響されるところも大きく、種々なものがある。ある疾患の頻度・重要度が低ければ当然それは対象とならないが、逆にそれがひじょうに大きい場合に、スクリーニング自体がむしろ余計な過程と見なされることもある。かつて多くの学校で

検便を省略して全員に駆虫剤を配布していたのは後者の例といえよう。わが国において、さきごろまでは肺結核に対するスクリーニングが健康管理業務の大半を占めていたことは、まだ記憶に新しい。

このように個別的な差はさまざまにあるが、スクリーニング対象疾患の時代的変遷にはほぼ一定の傾向が見られるもので、Wilson & Jungler がこれを三期に分け、前期(主疾患例——マラリア・線虫・らい・トラユーマ)、中期(肺結核・性病)、後期(糖尿病・虚血性心疾患・鉄欠乏性貧血)としたのは、この傾向をかなりよく表現したものと考えられる。

医学の進歩と疾病構造・保健思想の変化によって、現時点でわれわれの多くにとって身近なのはいわゆる成人病に対する総合的なスクリーニングである。すでに人間ドックは急速に普及し、これにコンピュータによるデータ処理を取り入れた「自動化健診 (AMHTS)」の施設もしいに増加しつつある。

人間ドックの創始者は故阪口康蔵教授とその一門(一九五四)であるが、ここではその前史と名称の起原について

若干の検討を試みるとともに、ヒトの疾病ないしそのスクリーニングに関連して、日本で「ドック入り」という呼称を昭和初年以前に適用した形跡が、ドイツの文献からうかがえるので、これを供覧する。

また日本の人間ドックと多分に共通点をもった企ては、や古く西欧にもあり、一九二〇年代末から三〇年代にわたって、ロンドンの一部が敬服に働かせる地域活動を行なった Peckham Health Centre & health overhaul について知る機会をもったので、併せてのべることにしたい。

(東芝総合健診センター)

ヘルス・サービスとモールのフィロソフィ

栗本 宗治

ナショナル・ヘルス・サービス一九四八は今世紀大戦と経済恐慌の後にもたらされたが、ナショナル・インシュランス一九一一、ドーソン報告一九二〇、ビバリッジ報告一九四二などが基盤をなしている。その間の王立内科医学会のモーラン卿とチャーチル、サー・ドーソンとロイド・ジョージなどの親交が注目される。

パブリック・ヘルス法一八四八、一八七二、一八七五は医学のみならず十九世紀英国社会を特徴づける。そこにはナイチンゲールによる病院管理の近代化があった。工場法一八一九、一八三三、新救貧法一八三四、労働者保健情況報告一八四二などにおけるチャドウィック、サイモンなどの貢献は大きい。ピール、グラドストーン、デイスレリなどの

政党、議会制形成とともにペンサム、ミル父子、ウェブ夫妻（フェビアン協会）を貫ぬく思想を見落すべきでない。産業革命は健康、教育、労働、環境を変えた。これらの相互作用のもとに「サーピス」、福祉、社会責任の社会哲学は形づくられた。以上の近代的源泉をペンサムとくにアダム・スミスに求めて検索を加える。

（大阪医科大学）

原著

林洞海の晩年の感懐と書簡

日本医学雑誌・第二十二卷
第二号・昭和五十一年四月
昭和五〇年五月二十九日受付

土屋重朗

はじめに

最近林洞海の晩年の書簡十通と一枚の書類の裏面に感懐をしるしたものが発見されたので、ここに発表したい。

林洞海については諸書に紹介されているのでいまさら説明するまでもないが、文化十年（一八一三）豊前小倉の篠崎村の生れ、明治二十八年（一八九五）没。享年八十三歳（数え年、以下同じ）。幕末の業績はあまりにも有名なのでここでは省略し、明治以降についてかんたんに述べると、明治元年徳川幕府瓦解後、宗家徳川家達に随って駿府に來り、翌二年三月沼津兵学校の附属として陸軍医学所が設立されて、その副頭取となり、やがて沼津病院と改称して、その重立取扱となった。この時五十七歳。

洞海の長男紀（研海）もオランダ留学を終えて、徳川家について駿府に來り、駿府病院（のち静岡病院と改称）の病院頭となった。この頃、洞海は六男紳六郎を沼津兵学校頭取西周助（周）の許に託して学ばせたが、西に子がなかったのでその養子とした。

洞海は明治三年新政府の招きに応じて出仕し、大学中博士となって東京に帰り、従六位に叙せられた。ついで大阪医学

校長となり、明治四年権大典医に転任し、皇太后付になった。明治九年四等侍医に任ぜられ、正六位に叙せられたが、その後は隠居して再び出仕しなかった。⁽¹⁾

なお長男の林紀は明治四年叔父の松本良順の推挙によって、軍医部に出仕して上京し、六年六月には欧米医学の研究のため渡航、七年二月帰朝した。西南戦争中は野戦病院を指揮し、戦争終結と同時に、十年十月第二代目の軍医総監に任じられた。明治十五年六月十八日、有櫛川二品親王のロシヤ差遣に随行し、パリで腎臓炎にかゝり、同年八月三十日三十八歳でパリで客死した。洞海の書簡中に紀に関係した事柄がでてくるので、あらかじめ略伝をしるしておく。

これからのべる感懐や書簡はすべて洞海の隠居後に書いたものである。

東京大学医学部学位授与式手続

表題の書類の裏に洞海の感懐が筆で書かれている。この書類の大きさはたて約二十五cm、よこ約四〇cmの比較的厚い用紙である。

この「東京大学医学部学位授与式手続」の内容は一般にほとんど知られていないようなので、先づこれから説明することにする。

「東京大学医学部百年史」⁽²⁾によると、医学部の第一回および第二回卒業について、つぎのように記載されている。

「医学本科生の第一回卒業は明治十二年（一八七八）十月であったが、この時は卒業式を行わず、直ちに学位授与式を挙行することになり、十月十八日に医学部第一回学位授与式が行なわれ、医学本科生十八名は医学士、製薬学本科卒業生九名と前年の卒業生と計十九名が製薬士の学位を得た。第二回の学位授与式は明治一三年（一八八〇）七月十二日、医学士十九名であった。」

しかし後から記載するように、医学部第一回生の卒業は実際は十一年十一月であった。学位授与式が翌年十月に行われ

述ス

医学卒業生惣代謝辞ヲ述フ製薬学卒業生惣代謝辞ヲ述フ

外国教授ドクトル、シュルツ君演述

同ドクトル・ランガルト君演述

学士会院会員福沢諭吉君演述

文部卿寺島宗則閣下祝辞ヲ述フ

畢

・製薬士ノ分

明治十年十一月卒業

士愛知族	士兵庫族	士熊本族	士熊本族	士熊本族	士静岡族	士長野族	士岐阜族
下山順一郎	丹波敬三	吉田学	小山哉	高橋三郎	丹羽藤吉郎	三村徳太郎	

長崎族 永淵嘉博

・医学士ノ分

明治十一年十一月卒業

士長崎族	士島根族	士青森族	士熊本族	士新潟族	士静岡族	士高知族	士愛知族	士静岡族	士秋田族	士平沼族	士静岡族	士山形族
清水郁太郎	河野衛	梅錦之丞	石黒宇宙治	片山嘉	野並魯吉	佐々木文蔚	熊谷省三	熊谷玄旦	鳥瀉恆吉	清野勇	大森治豊	

士青森族 田沢敬興

士島根族 梅錦之丞

士熊本族 河野衛

士新潟族 石黒宇宙治

士静岡族 片山嘉

士高知族 野並魯吉

士青森族 佐々木文蔚

士山口族 熊谷省三

士山口族 熊谷玄旦

士東京族 佐藤一之助

士石川族 魚住完治

士京都族 高階経本

・製薬士ノ分

明治十一年十一月卒業

士東京族	士山口族	士山口族	士山口族	士東京族	明
佐藤一之助	魚住完治	高階経本	高階経本	桜井小平太	乃美辰一

平長崎族 島田耕一

士秋田族 溝口恆助

士群馬族 八木長恭

士石川族 山田董

士山形族 高橋秀松

士石川族 細井修吾

士愛知族 藤本理

明治十二年十月

東京大学医学部

以て以下此盛挙を祝せんとす。夫レ洞海初て横文字を読むは今を距る五十年、其時に方て都下の洋学を以て名ある者、宇田川、坪井、小関、高野、箕作の四、五氏に過ぎずして、其書生に在りても稍頭角を現す者は緒方、青木、大石の兩三子に過ぎず。其後洋学漸く開くと雖、其進歩の緩慢なる。初て歩を学ふ小兒に似たり。然るに明治維新已來、遂に大步疾走して殆んど汽車の轍道を奔り、電信の全線を行くか如し、故に僅に十年左右にして、生徒の学位を得る者、若きの多きに至る。真に濟々たる多士と謂つべし、是れ偏に明治政府の勸奨に由ると雖、抑亦医学部諸君の提携にあらざんば、何を以て此に至らん。洞海竊に謂ふ。若し学歩をして明治已前の如くならしめは、千百年を歴るも決而如此なる能はず。今の進歩已に如此と雖、如是にして而して復進む能はされは、之を明治已前に視る、正に唯如是くならんや。然共愈強めて而して息まさらは、彼の進歩も豈其レ期すへけれんや、洞海將ニ古稀になんんとするも、尚頑健にして已に御明世に逢ふを樂しみ、又此大典を觀るを喜ぶ也。謹而祝す。

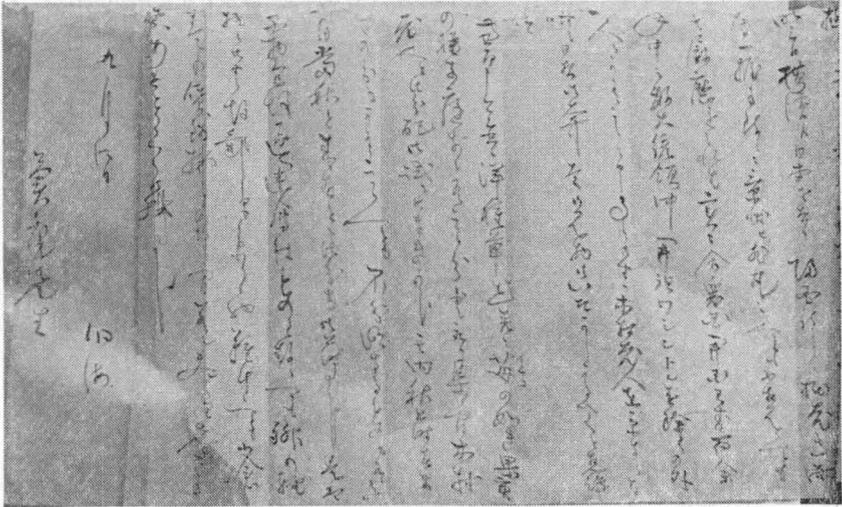
明治十二年十月十八日

正六位 林 洞 海

書 簡 (その一)

発見した書簡はすべて林洞海から小倉に住む篠田蒼庵という人にあてたものである。篠田蒼庵という人はどういふ人かよく分らないが、文面から推測すると洞海の幼な友達で、おそらく医者であつたらしい。小倉藩に藩医として一緒に勤めたことがあつたのかもしれない。その子篠田恒太郎は薬剤師となり、明治二十五年ごろは大阪の緒方病院に勤務し、三十四年大阪保生病院薬局長、三十四年より公立静岡病院薬局長をつとめ、三十九年辞職、その後のことは分らない。

書簡類は彼が静岡を去るとき放出されたものらしい。書簡の多くは物を貰つたり、送つたりしたお礼や通知の手紙であるが、多くは切手蒐集家によつて封筒をはぎとられたり、切手の周りを切り取られてスタンプの年月日が不明である。しかし文面からおよそ年が推定できるものもある。



林洞海の書簡の一部

つぎの書簡も封筒がないが、内容より明治十二年九月と推定される（句読点、濁点は筆者がつけた）。

「七月七日並ニ八月一日両度の貴家より相届書拝見仕候。時下稍々秋冷相増候処御揃御情福奉賀候。

横浜御抜錨後は風浪安穩、無事御平安御帰国之趣明細御伺ひ大慶の御事に御座候。陋屋一同無恙罷在候間御放念被下度候。本年は意外に早く伊予豊後之地より悪疫流行、追々全国に蔓延し、御地も新聞に悪疫著しかる可一見致し候所、随分流行之様子、都下も予防の術は嚴重被施候へども、只今ニ而者都心一般ニ相成、一日四五十名之発病に御座候ハ必然。是春も流行時ニ経験致し候も、水辺を遡うと申すが如き体にて、いつも海岸流水之辺、卑湿の地に多く、特に不潔汚滞之地甚敷御座候故、先づ御存知の山之手と麴町番町辺は何れともなきが如きの小人数にて、番町全地ニ而最初より今日迄発病五人にふえたるも、内三人は皆外方持込候者ニ而、本地本発とも可申は兩人のみ。夫レも家内之伝染者無之、畢竟高燥にて風氣逐暢宜敷故と被存候、尤此病のみならず流行状之病は総て不多候。

御地も過日長作君参候承り候処、豊津は高地之故か流行病者無之、此度も豊津には未だ発病を不聞との事、左もあるべし。全

て流行病などは唯ニ無用と奉存候。精々御予防に奔走被下度候。

木村老人之病氣之様子ニ付、処申上候処、御採用難有全く三叉神經之病と被存候故、近々快方ニ可相成、宜敷御伝願上候。先日より東京ハ米国前大統領グラント氏とふねの人來館にて度々の夜会及び大芝居等相見られ候上に而、昨三日横浜ヨ日本を去り帰国致し候。拙老も一面会一握手致し候、景状は非凡之人とも不相見候へども、其履歴をみれば実に合衆国開国已來百余年中之数大統領中、開祖ワシントンを除くの外一人に可有之と申事に御座候。木村老人東京にては唯々日夜御奔走御見物おいそがしかるべしと想像仕候。

過日申上候洋種草花並ニ苳の如き果実の種子、庭前に有之候分少し取り集め候間、木村老人と御分配御試み、御まき可被下候。其内秋之時期まきの分も可有之候へども、不分明なるものも有之候間、当秋と来春とに此分者御箒被下度候、是は品物包故逕達会社ものと致し候へども、殫の輕物に御座候故郵便に致し候間、難儀御座候へども小倉までの賃錢払と致候間、若し夫より先きの賃錢をとられ候はば、御払被下度候。

九月四日

蒼庵先生

洞海

手紙の内容は蒼庵が上京して無事横浜より船で帰国したこと。いま悪疫が流行していて、都心では一日四五十名も発病したとのべている。悪疫とは勿論コレラのことである。洞海持論は悪疫は水の多い不潔な地帯に多発し、高燥の高台は発病率がきわめて低いといっている。また木村老人が東京に来て遊んでいるが、この人は洞海、蒼庵の共通の友人である。

さらに洞海は米国前大統領グラント將軍が東京を來訪し、自分も一度面会し握手をしたが、噂ではワシントンに次ぐ名大統領であったという。その他、洋種の草花の種子などを送ることなどを書いてある。明治十二年には洞海は六十七歳であった。

書簡(その二)

「本月十四日の貴書を田辺武男氏出京便ニ御托し被下昨日廿二日朝、田辺氏拙宅に参り面会の節に正に請取拜見致候。御高年之処不相替御健勝之由実ニ欣喜之極ニ御座候。拙老も已ニ喜年と相成り、人は相節と称し候へ共、子供等におくれ候を自ら顧れば、是レ長寿の不幸ニ而嘆息ニ御座候。貴兄之御心中も御察上候。しかし是も現世之苦境とあきらめ居り、只今は孫児等の世話のみ致し居り候。

一、馬場君江の御届け紙包老簡昨日速ニ御届ケ申、請取出し参候故、預けいたし居り候。

松波資之江も昨日拙老序御座候ニ付、持参り候処、尚未だ不在に付いたし方なく候。

一、過日老人四五輩相伴ひ、墨陀の花見に参り、その前荘を一日かり受語ひ申し候、

其節同行の人の内に而詠歌御座候分を覚居候間、左に書付いたし上げ申候、即席之事故ニ全段名前をも覚不申候。

訪ふ人も問はるゝ人もなきことし墨陀河原のかたりさりけり

朗

朗とは方今陸軍軍医監なる石坂惟寛氏の父、隠居にて俗称賢荘と申、窟洞山人と申七十歳の人に御座候。備前の人なり。

春毎にかえらぬ友をしのはれてことしもすみたの花をみるかな

長鄰

長鄰は方今元老院の書記官なる有賀某と申人の父、隠居にて大阪人、数代和歌の宗匠の家に御座候、是も七十二歳の年に御座候。

思ひきや六十まで世にすみたかはらに此殿とはなをみむとは

蓮成法師

蓮成は京師の人、商家の隠居に而、幕府時代は其家世に御用立と申、株ある家に而、時めきしも、世うつり物かはりて世のはかなきを歎じ、家をすて雲水僧となり明治已来家なしに而、諸国の行脚致し候。僧と而資之の一派、偶其前日東京に来るを以て資之と同道に而来れり。

命にそうれしかりけれ此はるもともに楽しむはなの下かけ

資之

庭前の藤棚をみて

藤のたなとしとし広くなりにける家のさかえもかくそあるらし

資之

是より佐々木高行ぬしの許に行とて

くやくもなと契なむおもしろき今日の遊のありたるものを

資之

右の外に同行の友の歌御座候へ共、是は無明に御座候

一、不相替こぶのり沢山料理吟味致御座仕候草々不一

四月廿三日

林 洞海

篠田蒼庵様」

この書簡は洞海が喜年即ち七十七歳となったとあるから明治二十二年に書かれたものだろう。

前段では子供に先立たれた淋しさをあきらめきれない様子で書いている。洞海は佐藤泰然の長女つるを妻とし、子沢山であった。しかも養子も貰い、家系はなかなか複雑であった。酒井シヅ氏より教示された家系を表にするとつぎのようになる。

すなわち実子は男十人、女五人で二男と三男は夭折、他はそれぞれ一家をなし、また知名人に嫁している。別に養子もいる。

明治二十二年当時、紀と二、三男以外の子供達がすべて健在であったかどうか判明しないが、手紙の中で「子供等におくれ候を自ら願れば、是レ長寿の不幸に而嘆息ニ御座候」と、洞海を嘆かせている主因は何と言っても、長男紀の不慮の死であろう。

林紀は文久二年わが国最初の留学生としてオランダに渡り、新進の医学を修めて帰朝、若くして陸軍軍医総監となり、

洞海
つる

- 紀 (研海：長男・既述)
- 董 (養子・佐藤泰然五男、外務大臣、伯爵)
- 洞斎 (養子) — 糾四郎 (洞海四男) — 綏七郎 (洞海七男)
- 多津 (榎本武揚夫人)
- 貞 (赤松則良夫人)
- 紵五郎 (宮内広養子)
- 紳六郎 (西周養子)
- 浪 (神内由巳夫人)
- 佐用 (林徳左エ門養、凶師民嘉夫人)
- 紐八郎 (秋山八郎右エ門養子、相磯貞治養子)
- 喜太郎 (幼名紳九郎)
- 武 (何礼之養子)
- 鑑 (伊地知季珍夫人)

その性格は明朗闊達で将来を嘱望され、洞海も大いに期待していたのに、明治十五年三十八歳の若さでフランスで客死したのであるから、洞海の落胆はいかばかりかと察せられる。

その他の書簡

その他の八通の手紙は、物を貰った御礼や物を贈った知らせの手紙が大部分で、中には共通の友人の消息についてのべたものや、自作の和歌を被露したものもある。

以下五通だけ紹介しよう。但しいずれも年は不明である。

書簡(その三)

「秋冷之節に御座候処益々御清祥奉賀候。拙老も(ふし)消光仕居候間御救心(休)被下度候。扱四月十九日附之御書状入御国産こぶのり入紙包、今朝小笠原家之人白石豊友氏持参ニ而落手拜見仕候。不相替好物之品沢山御恵投、御厚志奉拜謝候。今年も小倉詰軍医某氏帰京之時少し持参り、紀にくれ候を少し分配し貰候のみニ而、其後雪野氏参り候節稍沢山貰候へ(と)とも、是とても直に用ひ切り居り候処ニ而難有奉存候。しかし小笠原やしきに四五日間仕舞込有之候故か、少しやわらかに居り候。先は不取敢御礼如此に御座候。

九月廿三日午前九時

洞海

蒼庵先生

尚々御知人の松波資之の賀宴歌集一冊及家集卷冊呈上候。但し是は段々木村隠居と話し、幸便ニ而呈上可仕候間御落手被下度候」

書簡(その四)

「前略新緑の候に御座候処、益々御清平奉賀候。然者此度貴国企矩郡曾根新田住之医松村嘉三氏者出京暫時滞留中ニ而、訪来り種々話中貴兄ニ送り度紙包の事相談致候処、持帰りきつと寄々相届可と申事に付、段々御好の浜名なつとう老籠の新来の品取請相托候間、六月中旬まで御届不申候ハハ曾根新田ニ而村松嘉三と御尋させ、幸便被御取寄可申候。先ハ右申上度如此御座候也。

(以下細字で余白及び本文行間に書込)

一、写真一葉差上可申候

一、尚納豆入籠ハ紙包ニハ不致候テハダカにてメバリの儘ニ御座候間(以下不明)

一、松波資之氏ニ頼候貴詠の御原稿参り候間一同書止申候。但一ヶ年に式夜六月十二月ト何程にても是、肴代御送被相成候也、右之外ハ礼を致す事無用。只今の処ハ先老口（以下十字不明）送り安心仕候。然者私とりかへシカク御了解、序御座候節奉願候也。

五月

蒼庵様

洞海

書簡（その五）

「先月廿五日附之御地より御出京の人被参、御托の御書状並ニ塩辛瓶詰一つ本日四日落手拜見、時下御清適奉賀候、拙老幸仕極平安御救念^(体)被下候、花衛堂松波氏ニ御送申候金老円包早速相届候処、別紙請取出し参候故差上申候、且ブリッキ之蓋付瓶入鮎子塩辛沢山御恵投被下難有相受早速賞味仕候。塩辛はこの人物へも自慢ニ而少々福分仕候、此度の品は殊に新鮮ニ而在来の塩辛の如き苦塩鹹の物に無之、誠に御地に於而嘗味同様の美味有之、是は全く蓋付瓶入ニ而外氣ニふれざるによる事と存候而配事難有御座候。

先年日向宮崎詰の軍医某氏より紀に送り来り候鮎の子の塩辛も亦貴贈品の如く新鮮美味ニ而御座候。是はブリッキ入ニ而蓋の口際は鉛ロウニ而密封遣候、鉛ロウ密封の術さへ^(て)き候へハ、却而途中破損の危険無之且輕便ニ而運送も都合よく御座候。何レ后便ニ而御礼の品送候へハ被御請且花衛堂の請取券呈上申右届及御座候

九月十四日

篠田蒼庵先生

林洞海

書簡（その六）

「拜啓陳者昨十九日ハ木村拜島老人之令弟君ノ婦豊ニ付、有合之扇子一隻呈貴覽に被供度ク候
一、過日御廻し之貴詠料ハ資之氏より直に御納被成候よしにて御落手之御事に候由。春來逐電ニ而さし出候浜名納豆其
後御落手ニ相成候や、若御落手ニ不相成候ハハ、端書ニ而宜敷御座候間、御序時御知可被下候。是ハ定而御落手之事ト
存候。是も亦御序之節御書添へ可被下候也

九月十七日

洞海

蒼庵様

書簡(その七)

「フリツキ・缶一つ并医之紙包沓つ添

拜啓貴地ニ行幸ニ付、御地は嘸未曾有之御事故無事□□□□事(不明)と奉存候。久敷御近況も不承且貴詠も御送無御座候間、
不相替御清榮之事と奉存候。扱木村新九郎氏為御先発明四月二日急ニ御地へ出立ニ成如何ひ御座候ハハ、便有九日又々
浜名納豆一籠御送御座仕候也

四月一日

林洞海

篠田蒼庵様

尚々外ニ紙包一卷松田春太郎殿の分も被相願頼候間、何卒御届被下度奉願候也」

むすび

以上、林洞海の東京大学医学部第一回学位授与式に参列の感懐と、篠田蒼庵あての書簡七通を紹介した。

感懐文も書簡もいずれも洞海が隠居後のもの、すなわち晩年に書いたものばかりである。書簡などをみると、悠々自

適、歌をよみ、花を賞で、余生を楽しんでいる一面も伺えないこともないが、長男紀に先立たれた淋しさが老の身にしみ、折にふれて紀の事を思い出している文面が処々に見受けられる。

(本論文の要旨は第七六回日本医史学会総会で報告した)

参考文献

- (1) 林洞海略歴 大日本人名辞書、講談社
- (2) 東京大学医学部百年史 東京大学出版会
- (3) 酒井シヅ著 日本医人伝第三回、清水郁太郎、日本医事新報「ジュニャ版」第一三三号
- (4) 鉄門倶楽部会員氏名録 鉄門倶楽部

Regarding notes of thought and personal letters written by
Dohkai Hayashi in the later part of his life:
Shigeaki Tsuchiya

Dohkai Hayashi was a famous scholar in the study of Dutch medical science in the late years of Tokugawa government.

After the Meiji Restoration he became the vice-director of Numazu Hospital and in 1870 and after he served various positions in the new government. He retired from official position in 1876 and died in 1895 at the age of 83.

As his notes of thought and letters he wrote after his retirement were found of late, these matters are now made public to the readers.

His notes are concerning his personal presence at the first graduation ceremony of medical academy of the Tokyo (Imperial) University, when the ever first group of 18 Japanese masters of medicine were newly born. He describes the scene with deep emotion in respect of the change of years as comparing the time when he first studied the medicalscience at his younger age.

Also there are altogether letters he left with the receiver, out of which 7 are now introduced. They are all addressed to the old friend of his childhood, Soh-an Shinoda.

Contents of the letters are diversified in subject and concerning the gifts he received as well as same he made

to his friend, also about the news of other friends and current occurrence. In some of his letters he even introduces his Japanese poem to the friend.

Tsuna, the first son of Dohkai became the inspector general of the then Army Surgeon, however unfortunately he died in Paris, France 1882 at his age of 38.

The early death of his son siruck Dohkai severely and he occasionally wrote down his grief and sorrow in some of his letters.

原著

酒湯記録より見た痘瘡・麻疹・水痘の大奥への伝播

前川久太郎

幕府大奥は、百余万のひしめく殷賑の江戸の中央にありながら、その実、制度上ほとんど外界との交通を絶ち、いわば閉鎖した極めて特異な社会を構成していた。このことは、種々巷間の臆測を生むことになるが、維新後、旧幕の内実を史料として後に伝えようとした人々によっても、かなり信憑性のあることとして肯定されている。「旧事諮問録」⁽¹⁾の中の中藺箕浦はな子、御次佐々鎮子の回想談などもその一つと言えよう。

さて、問題は、この巨大な閉鎖集団が、城外および城内表の逐年の疾病流行に対しどのように対応したかということである。やや大仰な表現を許されるならば、これは疫学的にも十分に研究対象たるべきことと言わねばなるまい。

最近筆者は、「御家譜」⁽²⁾、「幕府祚胤伝」⁽³⁾などの徳川家本支流の系譜記録中に、しばしば痘、疹、水痘の三症についての酒湯記録が散見されることに気づき、これを手がかりとして前記の問題を検討してみた。

対象としたのは、寛政元年（一七八九年）から文化を経て文政十年（一八二七年）の間に大奥で出生した十一代將軍家齊の子女五十余人である。理由は、筆者が酒湯の時代的変遷として別報⁽⁴⁾において述べたごとく、酒湯は江戸初期に次第に痘瘡の一治法として確立しはじめ、中期に至ってこれが痘瘡治癒の祝賀の儀となると共に、他のビールス性疾患たる麻疹

と水痘に対しても行なわれることとなり、化政期には記録としてもっとも徹底したかたちをとるからである。ちなみに、次の十二代家慶も十余人の子女を儲けるが、一、二を残して悉く夭折し、また十三代以後はほとんど城中に誕生を見ないので対象とはし得ない。

一方、これと対照すべき、これら寛政に始まる子女の出生期から、享和、文化、文政、天保、弘化、嘉永、安政に至る生長期に対応する江戸庶民間の三症の流行記録は、斉藤月岑の「武江年表」⁽⁵⁾（前篇嘉永二年、後篇明治十一年完成）に依った。江戸の、しかも庶民生活の逐年記録では、これをもっとも詳しくまた信頼出来るものであるからである。

前記の家斉の子女五十余の発症記録は、以後の解析をすすめるために、まずこれを一覧表とした。作表の規準としたところに關して若干の説明が必要かと思われるので、まずそれについて述べておきたい。

まず順位。家斉の子息、息女の数については異説もあるが、この順位および人数は「祚胤伝」のものである。他に若干の流体、血荒（流、死産）や養女があるが、それは順位には加えられていない。

幼名および元服名、配偶者名。名（幼名）は、誕生数日後に定められるのを常としており、したがって第二子、第五子などはそれ以前に死亡、「御名未_レ被_レ進_レ」とされている。元服・婚後の項は、男子では自身の名、女子では（ ）を附して配偶者の名を記した。したがってこの欄空白の者はすべて十余歳のこの時期までに死亡したものである。過半に達する。

母の名。家慶のお腹様となった「お楽」は別として、一般に二ないし四度ぐらいの出産を経験している。母の如何を問わず生後間もなく「御台様御養」となっているが、記録ばかりのものか、あるいは実の母の手許を離れて御台所（島津重豪息女、近衛経熙養女、寔子）の許で育てられることになっていたのであるうか。

生年月日、死亡年月日と生存年月数。両記録で若干のちがいのある場合があるが、その場合は「御家譜」⁽²⁾によった。後に述べる酒湯年月日についても同様で、理由は「祚胤伝」⁽³⁾よりは酒湯記録の採録がより徹底しているからである。生存年

月数は記録にはなく、筆者の算出したものである。四十一子末姫（浅野齊肅に嫁す）と四十四子永姫（徳川齊位に嫁す）の両名は少なくとも天保末期までは健在で、長命を保ったと思われるが、他家へ嫁しているため正確な死没年不明のまま空欄とした。末姫に関しては婚後に麻疹、水痘の罹患があったとも考えられるが、江戸城中での感染を調査の目的とした本篇では、今その有無を問題とする必要はない。流、死産を除いた五十三人中、一歳未満の死亡は十五名二十八%、同じく二歳未満は二十一名四十%の多きに及び、十五歳以上まで生存し得たものは僅かに二十一名四十%に過ぎない。特に初期すなわち寛政・享和期誕生の者に夭折が多いのは如何なる理由によるものであろうか。なお元号は、寛政を寛、享和を享、文化を化、文政を政、天保を保、弘化を弘、嘉永を嘉、安政を政、明治を明と略記した。また、○で囲んだ月は閏月を示す。

酒湯年月日。筆者の別報⁽¹⁾において述べたごとく、江戸後期の酒湯の儀は本復の賀儀であり、発症より十日前後の後に行なわれているのが普通であるが、症状に感じかなり長短がある。また、三十一子乙五郎、五十子富八郎はいずれも痘瘡により死亡しており、未だ酒湯は行なわれていないが、一応発症記録として本表に加えた。したがってこの二名の酒湯年月日の項に記されたものは死亡年月日である。

なお、酒湯年月日の空欄は、「御家譜」および「祚胤伝」⁽³⁾に若干の遺漏もあるかと思われるが、その多くは死亡時年齢よりみて、未感染のまま夭折したものと考えられるべきであらう。

検討事項

(一) 三症罹患の年齢

本篇の主目的とするところと必ずしも直接関係するものではないが、始めに、痘瘡、麻疹、水痘の罹患・発病の年齢を見てみたい。

順	性	幼名	元服・婚後	母	生年月日	死亡年月日	生存年月	疱 痘		麻 疹		水 痘	
								酒湯年月日	年齢	酒湯年月日	年齢	酒湯年月日	年齢
1	♀	淑 姫	(徳川齊朝室)	内証方	寛 1. 3. 25	化14. 5. 19	28 : 2	化 8. 12. 5	22 : 9				
2	♀	(未定)		内証方	寛 2. 10. 1	寛 2. 10. 2	0 : 0						
3	♂	竹千代		内証方	寛 4. 7. 13	寛 5. 6. 24	0 : 11						
4	♂	敏次郎	徳川 家慶	於 染	寛 5. 5. 14	嘉 6. 6. 22	60 : 2	政 3. 2. 22	26 : 8	保 7. 11. 3	43 : 3	寛12. 9. 13	7 : 4
5	♂	(未定)		於 梅	寛 6. 5. 9	寛 6. 5. 9	0 : 0						
6	♂	敬之助		於 歌	寛 7. 12. 10	寛 9. 3. 12	1 : 4						
7	♂	敦之助		御台所	寛 8. 3. 19	寛11. 5. 7	3 : 2						
8	♀	綾 姫		内証方	寛 8. 7. 11	寛10. 3. 28	1 : 8						
9	♀	総 姫		於志賀	寛 8. 10. 15	寛 9. 4. 24	0 : 6						
10	♂	豊三郎		於 歌	寛10 2. 28	寛10. 5. 24	0 : 3						
11	♀	格 姫		於里尾	寛10 8. 5	寛11. 6. 24	0 : 10						
12	♀	五百姫		於 歌	寛11. 12. 16	寛12. ④. 3	0 : 4						
13	♀	峯 姫	(徳川齊脩室)	於登勢	寛12. ④. 4	嘉 6. 6. 26	53 : 2	政 6. 1. 13	22 : 9	政 6. 3. 21	22 : 11	享 3. 12. 23	3 : 4
14	♀	亨 姫		於 蝶	享 1. 4. 22	享 2. 6. 4	1 : 2						
15	♂	菊千代	徳川 齊順	於登勢	享 1. 9. 9	弘 3. ⑤. 8	44 : 8	化 8. 12. 5	10 : 3	政 7 3. 13	22 : 6	享 2. 1. 9	0 : 4
16	♀	舒 姫		於 歌	享 2. 5. 7	享 3. 3. 4	0 : 10						
17	♂	時之助		於 蝶	享 3. 8. 1	化 2. 9. 14	2 : 1						
18	♀	寿 姫		於登勢	享 3. 10. 15	化 1. 6. 24	0 : 8						
19	♀	浅 姫	(徳川齊承室)	於美尾	享 3. 12. 10	安 4. ⑤. 19	53 : 6	化 9. 3. 13	9 : 3	政 7 1. 26	20 : 1	化 3. 11. 27	2 : 11
20	♀	晴 姫		於登勢	化 2. 12. 4	化 4. 5. 12	1 : 7						
21	♂	虎千代		於 蝶	化 3. 2. 11	化 7. 10. 2	4 : 8						
22	♀	高 姫		於屋智	化 3. 3. 1	化 3. 7. 23	0 : 4						
23	♀	安 姫		於 袖	化 4. 11. 14	化 8. 7. 27	3 : 8						
24	♀	元 姫	(松平容衆室)	於屋智	化 5. 7. 2	政 4. 8. 22	13 : 1					政 4. 8. 22	13 : 1
25	♂	友 松		於 蝶	化 6. 2. 21	化10. 6. 2	4 : 4						

26	♀	文 姬	(松平頼胤室)	於 袖	化 6. 7. 10	保 8. 3. 14	27: 8	政 1. 3. 9	8: 7	化 7. 3. 11	0: 8	保 7. 5. 19	27: 8
27	♂	保之丞	德川 斉明	於八重	化 6. 12. 5	政10. 6. 17	17: 6	化14. 1. 25	7: 1			政 3. 12. 27	11: 0
28	♂	要之丞	德川 斉荘	於 蝶	化 7. 6. 13	弘 2. 7. 21	35: 1	政 3. 1. 18	9: 5	政 7. 3. 5	13: 9	政 4. 4. 18	10: 8
29	♀	艶 姬		於 袖	化 8. 1. 22	化 8. 6. 28	0: 5						
30	♀	盛 姬	(鍋島斉正室)	於八重	化 8. 3. 12	弘 3. 3. 3	35: 0	化15. 4. 3	7: 0	政 7. 4. 1	13: 0	化 8. 11. 3	0: 8
31	♂	乙五郎	池田 斉衆	於八重	化 9. 4. 4	政 9. 3. 14	14: 1	政 9. 3. 14	14: 0	政 7. 2. 6	11: 10		
32	♀	和 姬	(毛利斉広室)	於 蝶	化10. 1. 14	政13. 7. 20	17: 6	政 6. 2. 9	10: 1			政 2. 12. 18	6: 11
33	♀	孝 姬		於 袖	化10. 1. 23	化11. 7. 21	1: 6						
34	♀	溶 姬	(前田斉泰室)	於美代	化10 3. 27	明 1. 5. 1	54: 2	政 6. 3. 9	9: 11	保 7. 11. 18	23: 8	政13. 2. 11	17: 11
35	♂	与五郎		於屋尾	化10. 10. 2	化11. 1. 2	0: 3						
36	♂	銀之助	松平 斉民	於八重	化11. 7. 29	明24. 3. 24	76: 9	化14. 10. 9	3: 2	政 7. 3. 16	9: 8	政 8. 5. 1	10: 9
37	♀	琴 姬		於 糸	化12. 6. 26	化13. 1. 11	0: 7						
38	♂	久五郎		於 蝶	化12. 8. 15	化14. 10. 16	2: 2						
39	♀	仲 姬		於美代	化12. 10. 17	化14. 5. 23	1: 7						
40	♀	信之進		於八重	化14. 1. 20	化14. 6. 16	0: 5						
41	♀	末 姬	(浅野斉肅室)	於美代	化14. 9. 18			政 6. 2. 9	5: 5				
42	♂	陽七郎		於 袖	政 1. 5. 15	政 4. 4. 10	2: 11						
43	♀	喜代姬	(酒井忠学室)	於八重	政 1. 7. 8	弘 1. 10. 10	26: 3	政 6. 2. 9	4: 6	政 7. 4. 1	5: 10	保 4. 9. 2	15: 7
44	♀	永 姬	(德川斉位室)	於 糸	政 2. 1. 14			政 6. 3. 9	4: 3	政 7. 4. 1	5: 3	保 6. 5. 28	16: 4
45	♂	進七郎	德川 斉温	於瑠理	政 2. 5. 29	保10. 3. 20	19: 10	政 9. 1. 22	6: 7			政 6. 4. 9	3: 10
46	♂	徳之佐	松平 斉良	於八重	政 2. 10. 24	保10. 6. 22	19: 8	保 4. 4. 2	13: 6	政 7. 2. 24	4: 4		
47	♂	恒之丞	德川 斉疆	於 袖	政 3. 4. 28	嘉 2. 3. 27	29: 1	政 6. 1. 18	2: 9	保 7. 11. 24	16: 7	政 8. 4. 28	5: 0
48	♂	民之助	松平 斉善	於 糸	政 3. 9. 24	保 9. 7. 27	17: 10	政 6. 2. 11	2: 5	政 7. 3. 16	3: 7	政 8. 5. 18	4: 8
49	♂	松 菊	蜂須賀斉裕	於八重	政 4. 9. 19	明 1. 1. 6	46: 6	政 6. 2. 12	1: 6			政11. 4. 29	6: 7
50	♂	富八郎		於 袖	政 5. 8. 5	政 6. 2. 27	0: 6	政 6. 2. 27	0: 8			政 6. 2. 27	0: 6
51	♂	紀五郎	松平 斉省	於 糸	政 6. 1. 28	政12. 5. 16	18: 4	政13. 11. 20	7: 10	政 7. 4. 1	2: 2	保12. 5. 16	18: 4
52	♂	周 丸	松平 斉宣	於 糸	政 8. 3. 9	保15. 5. 2	19: 2	政12. 3. 1	4: 0			保15. 5. 2	19: 1
53	♀	泰 姬	(池田斉訓室)	於瑠璃	政10. 10. 2	保14. 1. 4	15: 3	保11. 5. 1	12: 7			保14. 1. 4	15: 4

これと比較すべき江戸市中庶民の平均罹患年齢の資料に欠ける点、甚だ残念であるが、一応、五十三子を、第二十七子の保之丞までと二十八子要之丞以下二十六名の、前期出生群と後期出生群に分けて相互に比較した。

痘瘡年齢は全期を通じ九・一歳、内、前期七名平均十五・三歳、後期十八名平均六・六歳とその差は大きい。麻疹についても同様で、前期五名二十一・九歳、後期十一名九・五歳、平均十三・七歳であった。この前期と後期間の差は、何に原因するものか明確にしないが、痘、疹ともに後期には同時発病の例が多く、おそらくは管内に未成年者の多かった後期には子女間の相互感染がかなりあったものと思われる。すなわち、痘瘡では文政六年春に峰姫、和姫、溶姫、末姫、喜代姫、永姫、恒之丞・民之助、松菊、富八郎と、二十二歳から嬰兒まで十名が同時に罹患しており、麻疹でも文政七年春には、二十二歳の菊千代以下、浅姫、要之丞、盛姫、乙五郎、銀之助、喜代姫、永姫、徳之佐、民之助から二歳二ヶ月の紀五郎まで、実に十一名が同じ時期の発症である。これに対し、水痘にはこの同期発病、相互感染の傾向はほとんど認められず、最多の文政八年でもわずかに銀之助、恒之丞、民之助の三名であり、前期七名の発症平均九・五歳と後期十五名の十・四歳間にも差は認められなかった。なお水痘感染の全期二十二名の平均は十・一歳である。

(二) 江戸市中の流行との関連

先に述べたごとく、三症の江戸での流行記録は斉藤月岑(幸成)の「武江年表」⁽⁵⁾によった。祖父以来三代の労作「江戸名所図会」、「東都歳時記」につゞいて刊行されたものである。たゞし今回用いた金子光晴校訂の版では、いずれも写本として伝わる関根只誠書入れ本と喜多村筠庭補正本とを併せて編集しており、したがって引用に当ってはそれを明示した。(只誠)、(筠庭)の如くにてある。以下に寛政から安政に至る約七十年間の分を抄出する。

痘瘡関係

文政八年 (只誠) 秋より冬に至り痘瘡流行。

麻疹関係

享和三年 四月より六月に至り、麻疹流行、人多く死す。(筠庭) 此の節落首「江戸中の端からはしか一面にはやるは医者とあんまけんびき」。はしかも珍しかりし故人死も多かり、其後は往々ありて死するものなし。

文政七年 春より麻疹流行、夏、秋に至る。麻疹は東海道筋よりはやり来れり。

天保七年 七月、麻疹流行。

(安政六年 三月頃より麻疹に類せる病氣行はる)

水痘関係

記録なし。

以上である。勿論大流行のみの記録であり、それ以外の時期にも市中には常にこれら三症の患者はあったはずである。

酒湯記録もそれを裏づけている。なお、富士川游著「日本疾病史」⁽⁶⁾では、「医事雑話」(岩永藿斎)の記事として天保九年に痘瘡の流行のあったことを記している。

管内への伝播を考える資料として、痘瘡、麻疹、水痘以外の伝染性疾患をも考慮する必要があると思われる。幕府資料には死亡原因となった疾患でさえも、上記三症以外は全く記録していないので、直接的な比較考証は不可能であるが、管内の死亡年月日の記録と市中で多数の死亡者を出した他種伝染性疾患の流行年月との相関を検討してみることならば、ある程度可能である。前記期間内のこの条件に合致する流行記録には次のものがあつた。

文化十三年 初夏より閏八月迄、江戸疫癘流行。人多く死す。

文政二年 夏より痢病行はる。死亡のもの多し、この節の病を俗にコロリという。

安政五年 七月末の頃より都下に時疫行われて、芝の海辺、鉄砲州、佃島、靈岸島の畔に始まり、家毎に此の病痾に罹らざるはなし。八月の始めより次第に熾にして、江戸中並びに近在に蔓り、即時にやみて即時に終れり。貴人には少し。……俗諺に「コロリ」といへり。

安政六年 七月下旬より去年行われし暴瀉病ふたたび行われ、男女死亡多し、九月に至りて止む。

さて、管内と市中の両記録の比較であるがまず痘瘡での相関性を見てみたい。

先に述べたごとく、大奥では文政六年の春に痘瘡の大流行があった。十名が同時期に痘瘡酒湯を行なっており相互感染のあったことは否めない。それ以外に、同じ年のほぼ同じ時期に二名以上が罹患した例を拾うと、文化八年暮の二名（淑姫と菊千代）、文政三年一、二月の二名（敏次郎と要之丞）、文政九年早春の二名（乙五郎と進七郎）が見出される。問題はこの四回の集団感染と市中の流行の因果性ということに集約出来るわけであるが、先に述べたごとく江戸市民間の痘瘡の大規模の流行は文政八年秋から冬への流行と天保九年とがあった。

結論的にいうならば、大奥とは、疫学的にも外界と一応は隔離された存在であったということ、および、これとやや矛盾するようであるが、この隔離は必ずしも完璧なものではなかった、ということである。両者の流行の一致が、文政八年の秋から冬（文政九年）の市中流行と城中で同九年一月と三月に発病した乙五郎と進七郎の場合との間に認められるからである。四回の集団発症のうち、一回は庶民間での大規模流行と時期を同じくするものであったわけである。

麻疹に関しては、隔離はより不完全であったと考えられる。集団発症が、いずれも城外の流行と同時に起こっているからである。

酒湯記録から読みとれる麻疹の複数発病は、前項で見た文政七年一月から四月の間の菊千代以下十一名の場合と、天保七年秋の家慶（敏次郎）と溶姫、恒之丞の三名の場合とがある。たゞしこのうちの天保七年の際には、男子はすべて成年

に達しており、女子浴姫はすでに婚家前田家に在ったはずであり、今回の対照の対象から除外すべきものかとも思われる。しかしながら、この再度の発症期が共に江戸市中の流行と一致することは十分に注目し得る。ちなみに、市民間で大きい流行は、この文政七年の春から秋へのものと天保七年の夏、それに加えて享和三年のものがあった。

最後に水痘についてであるが、水痘では文政八年春に前後して銀之助、恒之丞、民之助の三兄弟が罹患しており、営内での相互の感染を考えさせるが、それ以外には一定した傾向を見出しがたい。他方、市民間の大きい流行も記録されておらず、両者を対比し因果性を云々する資料に欠ける。

なお、本篇の主題からはやや逸脱するが、文政二年夏、安政二年と三年の夏のコレラ大流行が大奥に及んだか否かの問題については、死亡年月日から見限り伝播はなかったように思われる。三症とは異なって感染源が飲食物にあるものであり、ために、伝播防止の対策の有無にかゝわらず、営内に罹患者の出る可能性はほとんどなかったとも考えられる。「武江年表」⁽⁵⁾、安政五年のコレラ流行の項の「貴人には少し」との記録は、その点でも注目すべきものであろう。

(三) 大奥への伝播阻止の対策

別報において筆者は、「御触書寛保集成」⁽⁷⁾より、痘瘡・麻疹・水痘の営内伝染防止に関する幕府最初の触書として、延宝八年（一六八〇年）の分を掲げ、これが後永くほぼ同一の内容と形式で繰返えされる触書の基本形となったことを述べた。すなわち、この間に医術の向上、疫病への基礎知識の進展があったにもかゝわらず、感染防止の対策はほとんど変るところがなかったということである。蘭方の導入も、所詮はこの伝統を改め得なかった。明治以後に相次いで明らかにされたこれら三症の病原体、伝染経路、潜伏期、消毒法などの諸知識と対応して見るとき、この江戸全期を通じて採られた柳営内の感染防止策が、どこまでが理にかなったものであったか、また、どの点に不備があったか、いずれ稿を改めて考えてみるつもりである。終りに、この種の触書として最初の延宝八年の分を「御触書寛保集成」⁽⁷⁾より再び転載するとともに、百数十年後の、記録に残された限りでは最後のものとなった文政八年の分を「御触書天保集成」⁽⁸⁾より引き、両者を併

せて管内伝播防止の根本方策がどのようなものであったかを推測する資料とする次第である。

延宝八申年十一月

疱瘡麻疹水痘遠慮之事

疱瘡

一 病人は見候日より三十五日過候て罷出、御目見仕候、

一 看病人ハ三番湯掛罷出、御目見仕候、一 病人果候共、看病人忌明候て罷出、御目見仕候

疹

一 病人ハ三番湯掛罷出、御目見仕候、

一 看病人 同断、

一 病人果候時ハ、疱瘡同断、

水痘

一 疹と同前、

右は御側之面々計、外様の輩ハ御構無之候、以上

十一月

文政八酉年二月

大目付え

疱瘡麻疹水痘病人若君様御座所之不罷出品

一 疱瘡病人は相見候日より三十五日過候ハヽ、肥立次第罷出、可相勤候、
一 麻疹水痘病人は三番湯掛候ハヽ、御番等可相勤候、

右之通、若君様御座所遠慮可仕候、且又 御本丸之儀は不及遠慮候、

但、若君様 御本丸え被為 入候節、且西丸御表え被遊 出御候節、御目通えは御定日数之通不可被罷出事、
一 疱瘡麻疹水痘看病人並療治致候御医師之儀も、御目通え罷出候儀、不及遠慮候、
一 疱瘡麻疹水痘病人より献上物、不及差扣候、

右之通、向々え可被達候、

二月

参考文献

- (1) 「旧事諮問録」 東京帝国大学史談会三好一光校註版、昭和四十年、青蛙房
- (2) 「御家譜」 徳川諸家系譜、第一、統群書類従完成会版、昭和四十五年、統群書類従完成会
- (3) 「幕府祚胤伝」 徳川諸家系譜、第二統群書類従完成会版、昭和四十九年、統群書類従完成会
- (4) 「幕府に於ける痘瘡・麻疹・水痘酒湯の変遷」 前川久太郎、日本医史学雑誌、二三卷、昭和五十一年
- (5) 「武江年表」 斎藤月岑、金子光晴校訂版、昭和四十三年、平凡社
- (6) 「日本疾病史」 富士川游、昭和十九年、日本医書出版
- (7) 「御触書寛保集成」 高柳真三・石井良助編、昭和九年、岩波書店
- (8) 「御触書天保集成」 高柳真三・石井良助編、昭和十六年、岩波書店

(東京医科大学解剖学教室)

Contagions of Smallpox, Measles and Chickenpox to Shogunate
Family in Ōoku from the Common People of Edo City

Kyutaro MAEKAWA

Ōoku, inner palace of Edo-castle, was the area practically isolated from the outside world for the private lives of shogun and his family. The princes and the princesses of shogun were brought up with strict care by many waiting maids in this palace.

In the present report, on the basis of the chronological table of sasayu ceremony which was celebration of recovery from smallpox, measles and chickenpox, records of these contagious diseases in 52 children of the 11th shogun Ienari Tokugawa were studied analytically with special reference to the correlation in prevalence of these viral diseases between the common people of Edo and the shogun's children in ōoku.

Result made it evident, when smallpox prevailed in the 9th year of Bunsei and measles in the 7th year of Bunsei and in the 7th year of Tempo among the people of Edo, many princes and princesses were also infected with smallpox and measles respectively. It was thought to show, therefore, that the persons in ōoku were not perfectly isolated epidemiologically from the contagia of the outside world. Physicians for the personages in ōoku and waiting maids visited by permission to her parents or those visited a temple or a shrine for her master seem to be possible mediator of the germs of these contagious diseases.

原著

小浜藩における林野家（小石元俊の祖） の事蹟について

田 辺 賀 啓

関西で蘭学をおこした小石元俊の祖先は、元小浜藩の重臣林野氏であったが、これに疑義をもつ論評もある。その理由は、代々家老職の身分にありながら元俊の父林野市之進（小石李伯）が何故これを捨て、浪人の身になったのか、その確たる理由の不詳なること、元俊在世中に杉田玄白に祖先の調査を依頼したが、その返答の不明なること、そして特に疑義をもたれたのは、市之進経歴のなかにある作州津山の城請取りから没年までの期間が、六十七年もあって、享年六十歳余と伝えられたこととの不合理さであった。⁽¹⁾

本稿では、元俊の祖先が小浜藩の家老林野家であったかどうかを、小浜にある資料と今回はじめて閲覧を許された京都小石家にある資料とを順次に述べつゝ、その事蹟に考察を加えてみる。

一、空印寺過去帳

昨年六月十五日（土）解体新書刊行二百年記念の講演会と展示会とを地元医師会と教育委員会が主催して小浜市文化会館で開催した。当日午前、来浜された小川鼎三教授の御希望で空印寺に参り、同寺住職の御好意によって同寺の過去帳の

閲覧をゆるされ、杉田、中川両家だけでなく、林野家も調べるよう小川先生の御指示をうけ、酒井シヅ講師と共に調査した処、別表一のように、林野惣左エ門父母、同夫妻、作兵衛夫妻、市之進兄妹、小石元瑞の九名の戒名を見出すことができた。惣左エ門夫妻と作兵衛には夫々院殿とあって家老級であったことが推定された。

本稿論述に便ならしめる為に、この過去帳戒名と地元小浜にある「抑景録」及び「逢昔遺談」更に京都小石家にある「小石氏祖先伝記」及び家系図を基礎にして、林野家系図（別表二）を作成した。市之進の兄妹については、兄か弟か、姉か妹かは不明であり、順位の変更もありうる。

二、林野惣左エ門夫妻墓碑（空印寺）

過去帳に明示されているので一族の墓石はあったはずであるが、空印寺は嘉永六年の大火で本堂を焼失し、明治十年には小浜小学校に、大正七年には国鉄小浜線に敷地の一部をゆづり墓地の様相も変っており、探索の結果、無縁墓地の中で林野惣左エ門夫妻（直昌院殿太山良吉居士
利生院殿養室貞安大姉）の墓碑一基を発見した。墓石の上部は欠損して、直と利の字の部より上方は失っているが、これは小石家にある墓碑の写しと欠損部も全く一致しているので、古くより欠損部はあったものと思われる（墓碑幅三
行一七・五釐
残高七〇釐）。

三、林野市之進寄進燈籠（空印寺）

昭和初年小石暢太郎（現当主秀夫氏父）が空印寺に参ったときには墓地は見当らなかったが、この燈籠を写真撮影していた。（7） 当時は藩侯墓所出入門に向けて右側の右四列目（最外側）の一番前に歴代家老の寄進燈籠と共にあったが、今回調査した処、現在はその四列目の燈籠は総てなく、これは今次大戦後の盗難と寺内各所に分散したものであることが分り、これらを探したが見当らず、最後に藩侯墓所内を念のために探した所、第十代酒井忠進公（酒井）の碑前にあるのを見出した。

市之進が仕えたのは第四代忠囿、第五代忠音であり、戦後たまたま空いていた場所に据えられたものと思われる。只々この十代忠進の侍医であった人が後述するように小石家祖先の発掘に貢献する。灯籠は基壇四十六種四方、高さ百七十種で四角形柱状の竿の正面に、献上石灯籠壹基 林野市進直頼 左側面に、宝永閏三丙戌曆九月八日 とある。これは四代忠囿の逝去の日に当り、市之進が城代職になって一年余のことである。材質が花崗岩であるため風化していて彫られた文字は拓本をとり確かめた。

四、郷土資料による林野家三代の事蹟

夫々の記事は、筆者が簡約した。

(一) 「仰景録」 明和二年(一七六五)山口安固(春水)が藩祖酒井忠勝の言行を誌したものである。⁽²⁾

初代惣左エ門は浜町下屋敷の辺の出火に唯一人行った所、刀を抜き切りかゝるものあり、人違いと再三言ったが、聞入れられず、頻りに切りかゝられて、止むなく切とめ、これを町内の人が見ておって、町奉行に言ったので奉行も人違いなることを認め、藩侯に甲斐々々しきことと申上げたが、忠勝公は政務に携わる身で供もつれずに歩くのは不謹慎と呵られた由。忠勝が諸士の心を試して、全藩士を集めて忠直(二代藩主)に御代譲らずと言われた所、林野何某進み出で、忠直君に御譲りあれと進言し、一同同意した。忠直は、これに感じて家督後、林野に増加ありしと。

(二) 「逢昔遺談」 文政八年(一八二五)田中貞風が、初代忠勝より九代忠貫までの郷土に遺された人物の話を誌したもので、全七卷よりなり、林野三代のことは一之巻と二之巻にある。⁽³⁾

惣左エ門は、はじめ惣十郎といひ小姓のとき、忠勝公が上使として京大阪に行った際、淀の城主永井信濃守と同宿した。他の近習が寝ているのに終夜灯をもち、殿より何度も臥せてよいといわれたが、その儘つづけ、江戸に帰って二百石をたまわり、其後三千石の家老職となり、当時は江戸で「林野の酒井殿」といわれた程の勢であった。忠直家督の際に忠

勝は、惣左エ門は其許にてはもてあつかひものなり、随分頭を押えて召つかわせと、又惣左エ門を召して、忠直は年若なれば我等に物申したる如く云ひたきまゝを申さは堪忍しない、必慮外を申すなど云われた由。

作兵衛は延宝四年（一六七六）家督相続して二千五百石、父没後三千石になった。延宝二年、惣左エ門存命中、作兵衛五百石取りの時、藩士斉藤弥右エ門の切腹事件があった。藩の御勝手不如意で家中の知行のうち御借米仰出され、足輕の給分も相応にすることに内定していた処、この人が反対し、切腹の前夜、江戸より来ていた作兵衛の家で口論し、御家のこのようになったのは御親父惣左の仕業だと言っているのが聞えた由。

元禄四年（一六九一）四月、作兵衛死去、同年七月六日知行三千石の内七百石を跡式として其子市進直頼に下さる。市之進が大身分の時、作州津山の事があり、市進仮役仰付られ、願出て本役仰付られ万端勤めしとも、無役御供にて行きしとも、又組頭の一つ欠け市進に支配仰付られたが断った等数説がある。次原文にて、

扱市進宝永二酉年（一七〇五）六月御城代仰付置れ候処いかなる所存に哉同七寅年（一七一〇）八月十六日願の上永く御暇下し置る其節仰渡され候趣

林野市進同惣次郎へ申渡

市進儀近年病身に罷成候旨被為聴緩々養生仕候様にと思召昨日隠居被仰付家督惣次郎へ被下候処父子共病身に付難相勤御暇相願御心外に被思召候乍去相願候は永く御暇被下候

八月十六日

右市進宅は只今の深檜千馬允屋敷にて有之候由立退候節行列甚嚴重にて鉄砲には火繩をかけ立退候由深檜典膳語りき。又市進内儀は病身にて即日立退がたく仍之守留加左エ門（貞益）申達し当分加左エ門方に引取置まうされ同九月七日市進内儀下女一人召つれ上方へ立退れ候由市進子孫今小石玄瑞とて京都に医業相勤居候赴也。

小浜藩の藩士分限帳で高禄の士は、寛永十四年では特殊の一名を除けば二千石から三千石は三名⁽¹⁰⁾、明治維新当時では藩主血縁の三千二百石の一名を除けば千石から千二百石が三名である⁽¹²⁾。このことから林野三代は筆頭格の家老であったことが分る。退身の理由は、小石元瑞の「先考大愚先生行状」に「初作州津山の城請取の節軍師並にて供可_レ致由被_二申付_一候事、又其後城代職の閑地に被_二措置_一事_ナ忤_ナ心に染ぬ故にや、病氣の由申立、退身して名を隠して小石李伯と改む⁽¹³⁾」とあるのが骨子であり、その他は前述の前後の事柄から推測しうろと思われる。小石元俊が杉田玄白に祖先のことを問合せたのは寛政十一年（一七九九）頃のこと、退身の時から八十九年も後のことである。玄白は、この年に酒井侯の世子の診療を元俊に依頼⁽¹⁴⁾しているが当時の事情や藩の内情によって容易に明になし得ない理由もあったかと想像される。最も疑問とされたのは市之進の作州津山城請取りから没年までが六十七年あり、似月次郎八の「小石大愚先生行状」では行年六十歳⁽¹⁾位、小石第二郎の「小石家譜」では、享年六十歳余ナルベシ⁽¹⁶⁾、とあるのと一致しない点である。作兵衛の家督相続は二千五百石、没後三千石で、市之進の時は跡式として七百石（或は千七百石）で低くおかれている。このことが退身へ導く第一歩の原因であったかと推察される。作州津山の件で家柄不相応と不満であった事と想像されるが、一人前として扱って来ていない様子もみえる処から、跡式当時は多分十歳そこそこの年ではなかったかと推定される。浪々の身で名を変えた事情からも年齢に十ないし二十歳の隔りがあってもおかしくはないと考えられる。この点を現当主小石秀夫氏にただした処、取出されたのが未公開の次の一書である。

五、「小石氏祖先伝記」（京都、小石家蔵）

文政十一年（一八二二）小石元瑞謹記とある手書き文書である⁽⁴⁾。これには既述の事蹟は元より更に詳細な資料をもって綿密に考察されている。元瑞は彼の幅広い交友や門下生をも通じて祖先のことを調査しており、本記は、高祖父初代林野惣左エ門、曾祖父二代目同作兵衛、祖父三代目同市之進の各事蹟伝来書と附録私考、附林野銃記、展墓詩等からなる。元

瑞自身も市之進の家督から死去までが七十三年もあることを注目していたようで市之進の項にその多くをさいている。以下本稿に必要な一部を簡約して述べる。

市之進の子が李伯との疑いもあれど、彼（惣次郎）は流浪中死亡しており、李伯の継室の親者の話では結婚のとき大身の浪人で人に勝れ、諸々の達人で大阪に出て直に医業や茶事や歌連歌の指南などをした点からも市之進の子ではあり得ず、一旦は憤り流浪はしたが君侯の名を出し、祖先の名を汚すことは口惜しかつたのか一切口外はしなかつた。と、祖母さよ（継室）は長年連添っている間に、原姓林野で若州を退身したことは果らずも少しづつ分っていたようで、祖母在中に小浜時代に召仕えていた者（三田村何某、鳥羽庄三田村の出）が加州に住み、其娘が加州侯に奉公し、御手が掛り男子が生れた縁で三千石の家老職にあった。この人が加州に来るよう使者を送ってきたが、市之進困窮しあるも女子の縁で出世するような腰抜け士の世話にはならぬと断り、使者は赤面して帰ったという。このことは祖母より申伝へで先考（元俊）からも折々聞いていた。小浜退去時、玄関に飾っていた鳥銃を重役方へ遺物として置いてきたが、名器たる林野筒と唱え、夫々の家では自己の紋に変えて秘蔵していた。小浜藩医橋山宗安は杉田玄白、小石元俊の門人で、第十代酒井忠進が京都所司代時代に侍医をつとめており、その子息宗哲は元瑞の門人であった。先祖の遺物を探し求めていた元瑞は、この橋山宗安の世話で青山何某所蔵で、林野の紋の遺っている林野筒を文化十年冬に入手し、小浜藩儒山口重円（管山、貞一郎）より「林野銃記」を贈られた。これは本記の末尾にある。

因に付記するが、山口管山は崎門学望楠軒の中興の租で、同藩伴信友とは一つ違いの年長で交友も親しく、「仰景録」の山口安固（春水）の孫に当り、杉田玄白にターヘルアナトミア贈入の世話をした岡新左エ門¹⁹は、彼の伯父になる。管山の門人には梅田雲浜、十三代山内公、有馬新七などがいる。

元瑞が、この手記をなす原動力ともなり、手記内容の多くの部分を書くことのできたのは橋山宗安と松本加兵衛の尽力に依るものである。松本加兵衛は別表二に示すように、先祖は作兵衛の養妹より出て、代々加兵衛を名乗っている。文政

六年十二月、殿中で会った二人は子息宗哲の話から、玄瑞が祖先の墓所を探している旨に及び、松本氏が小石（林野）家とは古い親戚であり、空印寺の同じ檀家であつて、寺に参つたときには林野の墓地にも香花を手向けていると話をし、宗安を空印寺に案内した。この旨、宗安は十三日に書をしたため玄瑞に知らせ、翌正月二日玄瑞入手、この時玄瑞は、「拙者の喜無限、先老存生中に不相分事是而已残念に存じ候事に候」と。取敢えず門人を空印寺に参詣させ、松本氏に始めて音信、年来の謝を申した。宗安と門人とで位牌吟味して凡十人の法名等分り、墓碑四ヶ即ち直昌院殿利生院殿合一ツ淨智院殿真珠院殿合一ツ春光良三居士一ツ涼雲院殿天真院合一ツも分つた。過去帳にて誰の子、誰の室と分り、松本氏も種々配慮してくれた。又祖父を葬りし梅旧院は空印寺末寺で祖先の墓碑が分らなくて一向宗ではないかとの説もあつたが同派の寺に墓地を探されたことが分つたと述べている。不思議にも翌年は惣左エ門百五十年に当り、文政八年三月十六日出生で玄瑞は小浜に行き、宗安宅に滞留。松本氏宅にも招かれた。今以て別の主人に仕えず浪人暮しをしているのは松本氏には好土産であつた。是祖父及び先考の遺教に随ひし故の事と。この時、藩の重臣酒井伊織から惣左エ門の書翰を入手して家宝とし、その年冬正忌には床に掛け供香。海商古河嘉太夫からも市之進の形見の品や、仕えし人のことを聞く。

附録私考では、市之進の年齢を推定している。市之進跡式十五歳位、十二、三歳でも表向き十五歳として継目をたてること世に多し。津山城請取二十一歳位、城代職二十九歳位、退身三十四歳位、先室死去四十三歳位、先考出生六十七歳位、死去八十八歳位とし、李伯と申すは市之進で相違なく、家名を早く相続いたし、長寿であつたためで少しも疑義はない。後の者の疑をおこしてはと思ひ、子孫に遺す。子孫皆々大切に心得よと。

筆頭家老の父の下で家老たる素地を長い間に培い、在世中に家督をついだ作兵衛に較べて、元服したかどうかの若年で父を失い跡目をつくことになつた市之進だけに、その後の運命はかわつたものになつたであらうし、退身理由も前述の点から略々理解できさうである。辞任の理由の真相は今も昔も他人には分り難い。杉田玄白の祖父甫仙が新発田藩を辞めた理由⁽²⁰⁾は明らかであるが表向きは病身を名目の永の暇であつた。この二人の其後の生き方は違つてはいるが、辞任時の心情

には共通したものを感ずる。

祖先の調査を玄白に頼んでからは追々少しづゝ分り、玄俊没前後には林野家の大略はつかめていたのではなからうか。然し遺品もなく、家系のつながりの詳細なことまでは判明せず、元瑞は折にふれ探索していたことが読みとれる。そして最後に、その菩提所に参詣して略々全容をつかむに至り、手記を子孫に遺したのである。

市之進事蹟の疑義は彼が若くして跡目をつぎ而も長く生きたがためであるが、元瑞の推定年齢よりは数年は低くともよいかと思われる。

山脇東洋の解屍の官許願の筆頭に原松庵⁽²¹⁾がいる。これは二代目原松庵で、初代松庵は二代松庵の祖父に当るが、二十歳代後半に但州より小浜に来て医業を行っている。原家の「租考記」⁽²²⁾によれば「宝光院様(四代酒井忠・)御代元禄十年丁丑之秋作州津山騒動御城受取之節御供被仰付」とあり、元禄十四年藩医となっている。父祖代々の家老職の実子ながら大身分無役で役向き不満げの二十歳足らずの市之進と、片や円熟した町の名医で四十八歳の松庵、この時二人の間に接触があったかどうか、後年医を以て業とし、「今の世に人を濟ふと云事は医事の外に有べからず」⁽²³⁾と元俊に医をすすめた李伯であっただけに興味はある。

元俊が山陽に碑文を頼んで大阪夕陽丘の梅旧院にある李伯の墓碑⁽²⁴⁾を重修したのは文政八年五月で、元瑞の小浜行の二ヶ月あとである。元俊の師淡輪元潜⁽²⁵⁾(一七二九—一八〇八)は三代目元潜で山脇東洋の門人である。李伯は自分の墓は淡輪先生の傍にいたいとのことで梅旧院に定めたこと⁽²⁶⁾であるが、それが林野家の菩提寺の末寺であったのは奇縁であったのか。或は終生家系及び生年を語らざりし李伯が唯一人承知していたことであるのか、元瑞も誌しているように多分後者であったのではなからうか。

御指導御韃達をたまわりました小川鼎三先生、調査に御協力下された酒井シヅ先生、貴重な資料の閲覧をゆるされた小石秀夫先生、原一夫先生、岸本空印寺住職に御礼申し上げます。又調査探索に協力いただいた小浜市立図書館小畑昭八

郎、小浜市文化課杉本泰俊、公立小浜病院河原朝夫、藤田孝彦の諸氏に感謝いたします。

文献

- (1) 山本四郎 「小石元俊」 吉川弘文館 昭和42年 三一六、一六三―一六五
- (2) 成田鋼太郎編 「酒井忠勝公年譜并言行抄」 旧誼会 明治44年 一一八―一一九、一六二
- (3) 田中貞風 「再考逢昔遺談」 上巻 香川政男 昭和36年 三一五、五二―五六
- (4) 小石元瑞 「小石氏祖先伝記」 京都小石家文書 文政11年
- (5) 小石秀夫 小石家系図 京都小石家
- (6) 林野墓碑写図 京都小石家文書
- (7) 小石暢太郎 市之進献上燈籠写真と配置図 京都小石家文書
- (8) 赤見貞 「蜘蛛の網」―若狭の文化と伝統― 小浜市立図書館 昭和46年 三九六―三九七
- (9) 「酒井家御歴代一覽」 旧誼会 大正5年
- (10) 藤井讓治 「酒井忠勝」 小浜市立図書館 昭和49年 七一―一〇
- (11) 赤見元喜写 「空印様空山様両御代分限帳」 天保9年 小浜赤見家文書
- (12) 若州藩士分限帳 明治2年調 小浜市史編集室
- (13) 山本四郎 前掲書 四
- (14) 杉靖三郎 「杉田玄白全集第一巻」 生活社 昭和19年 四二二
- (15) 山本四郎 前掲書 一七三―一七九
- (16) 同右 二四
- (17) 小石元俊 日経メデイカル 昭和49年5月 一三六―一三七
- (18) 赤見貞 前掲書 五六―一五一
- (19) 田中貞風 「再考逢昔遺談」 下巻 香川政男 昭和36年 五〇―五一
- (20) 片桐一男 「杉田玄白」 吉川弘文館 昭和46年 四
- (21) 呉 秀三 我邦漢方医及び蘭方医の最初の解剖に関する読史余談 中外医事新報 昭和4年 一一四三号 四三―四五、一二

- (22) 「原家祖考記」 高槻原家文書
- (23) 山本四郎 前掲書 七
- (24) 同右 二四—二五
- (25) 同右 九
- (26) 中野 操 76回日本医史学会総会発言 於大阪 昭和50年

別表一

空印寺過去帳 (林野家)

- ① 本智宗源寛永六己年十一月八日
禪定門
林野惣左工門 父
- ② 長清妙寿寛文元辛丑十月十九日
信尼
林野惣左工門 母
- ③ 直昌院殿延宝四丙辰年十二月四日
太山良吉居士
林野惣左右衛門
- ④ 利生院殿貞享四丁卯年十月四日
養室貞安大姉
林野作兵衛 母
- ⑤ 淨智院殿元禄四辛未四月十三日
運中全勝居士
林野作兵衛事
- ⑥ 真珠院心延宝九辛酉年六月二十七日
応宗清大姉
林野作兵衛 婦
- ⑦ 桃林院春元禄四辛未三月二十五日
光良三信士
林野作兵衛 子息
- ⑧ 涼雲院花天和三癸亥五月晦日
○妙室大姉
林野作兵衛 二女
- ⑨ 三秀軒嘉永二年己酉二月十日
○翁宗竜居士
京都 小石拙翁事

Hayano Family (Ancesters of Genshun Koishi) in Obama Clan

Yoshihiro TANABE

It is said that the ancestor of Genshun Koishi who disseminated the study of Dutch medicine in Kansai area was Hayano Family, ministers of Obama Clan, while some people have doubts about the above. Though there were some doubts that the reason for Ichinoshin Hayano's resignation from the said clan, his career and his epoch and age were not ascertained, these doubts have been elucidated by inquiring into the local literature in Obama and the manuscript data in the Koishi family in Kyoto which I was admitted to peruse.

The names of the founder Sozaemon Hayano couple and his parents, the second Saku bei Hayano couple, the third Ichinoshin Hayano's brother and sister, and Genzui Koishi (son of Genshun) are mentioned in the necrology at Kuinji, family temple for Sakai, Lord of Obama Clan. It is presumable that Sozaemon and Sakubei with a posthumous Buddhist name "Inden Koji" were the people of high standing. The gravestone of Sozaemon couple was also found out in Kuinji, which reveals that this temple was the one for Hayano Family. Besides, there exists the stone lantern offered in honor of the deceased lord by Ichinoshin Hayano as well as other ministers. "Gyokeiroku" and "Osekiidan" left in Obama refer to the ministers' historic facts in Hayano Family for 3 epochs, which allows us to know their respective status, career, personal image and the circumstances before or after their resignation from the clan.

The biography of the ancestors of the Koishi family drawn up by Genzui Koishi and transmitted to the family reports more detailed data and the results searched for by himself. In view of Rihaku Koishi's career and age, Genzui testified that Ichinoshin Hayano was Rihaku Koishi, father of Genshun Koishi.

二百年前のアメリカ医学

Iiza Veith

第二次世界大戦以後アメリカ合衆国は、医学的科學の發達のうゑで目を見張る優越性を獲得しました。かえりみれば、今世紀の初頭の十年二十年までのこの国アメリカは、まだ全くヨーロッパの科學に依存しており、たいていのアメリカの醫師は、事情のゆるすかぎり、ヨーロッパへ出かけて醫學を勉強し、あるいは卒業教育を仕上げたというのが事實でありまして、このことを想起すれば、第二次大戦後の醫學分野において、このように突如として抬頭したのは、むしろおどろくべきことであります。

かれらがスコットランド、すなわちエジンバラへ行くか、イングランドへ行くか、それともヨーロッパ大陸でドイツかパリかウィーンへ行くかは、かれらの外國語を學ぶ能力と上手さにかかわることでした。

アメリカの人が外國で勉強する慣行は、二百年以上まえにはじまっています。それはアメリカ植民地が獨立をちとるより以前、かれらの教育の仕上げをかれらの母なる国イギリスにたちよっていたころにまでさかのぼります。

わたくしが「二百年前のアメリカ醫學」についておはなしすることにしたのは、イギリスからアメリカが獨立した二百年祭が来年おこなわれるからということ、この行事の準備をしているうちにアメリカの人々に歴史の感覺を与えた

といひますか、歴史づかされたといひますか、このような、普段のアメリカ人の生活と思想のそれほど目立つた特徴でないものを与えたからであります。ですから、このアメリカ合衆国が形成されてからの二百年記念の祭典が近づいてくるこの時期にあたって、二百年前の、この新生国の健康と病氣の状況をしらべるといふことは、われわれにとつて、おそらく理にかなつたこととおもうのであります。

植民地がイギリスから脱退したころのアメリカの医学はどんなであつたか？　この質問に答えることは容易であります。といひますのは、そこにはアメリカの医学というものが存在しなかつたからであります。それはあたかも、そのころ、アメリカ合衆国そのものがなかつたように、アメリカの芸術も建築も存在しなかつたわけです。二百年前アメリカで行われていた医学は大なり小なりアメリカの必要と要請に適合させたイギリスの医学でした。独立をかちえたのちでさえ、アメリカ人は、つづいてイングランドとかスコットランドへいって医学を学びました。ロンドンとかエジンバラではアメリカ人は、そのまゝ英語をしゃべり、きいていればそれですんだわけです。ですから、アメリカの政治的独立はイギリスからかちとりはしたが、知的・医学的にはグレート・ブリテン依存という状態はそれから長年つづきました。

今日では、ニューヨークがアメリカの最大の都市であり、ワシントンがアメリカの首府であることは世界中が知つております。しかし二百年前は、フィラデルフィアが人口四万三千で、北アメリカ最大の都市であり、フィラデルフィアは、政治的・文化的活動の中心の役割をつとめました。ですから二百年前のアメリカ医学は、本質的にフィラデルフィアの医学であつたのです。実際、記録すべきアメリカ最初の病院であるペンシルバニア病院は、一七五一年フィラデルフィアに設立されました。この病院は十四年後の一七六五年にペンシルバニア大学医学部に合併されました。この大学は年代的には、アメリカ移住のはじまつたそもその初期の一六三六年にマサチューセツに創立されたハーバード・カレッジに次ぐ第二番目の古さです。

一七七五年独立戦争が起りましたとき、この新しい国においてなし得る最善のアメリカ医学（医療）を組織したのは、フィラデルフィアの医師たちでした。その間にあって、数少ない、よく訓練されたフィラデルフィアの医師たちのなかで、ベンジャミン・ラッシュが最も有能・多彩の医師としてひとときわ目立っていました。彼はのち「アメリカのヒポクラテス」とか「フィラデルフィアのシドナム (Sydenham)」とかいう名で知られるようになりましたが、彼は合衆国の存立の最初の何十年かに活動したすべての医師のなかで、もっとも創意にみち、献身的な医師でした。ですから、フィラデルフィアにおけるベンジャミン・ラッシュの生活と業績とを述べれば、大体、二百年前のアメリカの医学を述べることになります。わたくしは、この一人の医師、ベンジャミン・ラッシュ、初期のアメリカの医師のなかでもっとも有名なこの医師こそ、アメリカ医学の必要と成功とをまことによく代表していると信じます。なぜなら、彼はその多くの書きものなかで、当時北アメリカに存在したほとんどすべての医学的・社会的諸問題にぶつかりそれを記載しているからです。

十七・八世紀の入植者の試練と冒険のかずかずは、かれらの船が北アメリカの海岸に達するよりはるかまえからはじまりました。ジェット機で空の旅をする今日、イギリスの海外移住者が西方にむかって移動をはじめたころ、大西洋の横断がどんなに大変なものであったかを想像することは困難です。かれらの小さな帆船は、混みあって、きたなく、食物はわるくて不潔で、これらの船内の衛生状態はもっとも原始的なものでした。航海は六ヶ月もかかりました。横断のたびごとに多くの乗船者が病み、死にました。かれらは新鮮な食品の欠乏による壊血病と船酔に弱りはて、感染に抵抗することができませんでした。小さな船内では病人を隔離することもできませんでした。それで病気はほしいまゝにはびこりました。いくつかの航海では、海岸につくまえに大部分の船客、船員・クルーが失せてしまったというようなことがありました。航海での死をまぬがれた人々でも、アメリカへついたときは、イギリスやオランダから持ってきた伝染病の保持者でな

くとも、かれらの航海はヨーロッパの温帯地から出発するのですが、実際にはマラリアとか黄熱のような熱帯病の伝搬者でした。それは、柑橘類と新鮮な水を補充のためアゾレス島に寄港したときにもらうらしいのです。つまりそのフタのない水バケツに蚊が卵を産みおとし、それがマラリア、黄熱の病原体の担手になるのです。マラリアも黄熱もいずれも入植者が北アメリカに来る前には、この地の地域流行病ではなかったのですから、入植者たち自身が自分たちをむしばむ病原体を持ちこんだことはあきらかです。同様に、痘瘡と麻疹のような重要な医学的厄介ものを持ちこんだのもかれら入植者でした。ただしヨーロッパからの移民にはある程度の獲得性の免疫性がありましたが、土着の人々にはたちまち命とりになりました。というのは、それまでに一度も麻疹に曝露したことのなかったアメリカ・インディアンスの多数が麻疹の犠牲となつてたおれました。もっとも人口密度がまばらであつたため、ヨーロッパの過密都市や地方の場合のように、この伝染病に大した火を貸すようなことはありませんでした。しかしヨーロッパの学術の中心地の医師がこれら流行病に対抗することに無力であつたのでは、この新世界の開拓地のごくわずかな、訓練の不十分な医師と医療施設とになにほどのことが期待できましよう。

三

これらのおそろしい病気のうちで、痘瘡はもっともひろくひろがり、致死的のものでした。痘瘡にかかつて生きのびたものは、普通永久の痘痕をのこして醜い変形をきたしました。しかしアメリカ移住のはるかまえに、この病気の予防の第一歩が、遠東ならびに東地中海の諸国で踏み出されました。

紀元十二世紀にシナと小アジアの小児たちは、痘瘡患者の膿の小量で故意に感染させられました。かれらは普通この病気に軽度にかかりますが、わずか数個の痘痕をのこすだけでなおり、あとに免疫をのこしました。このように感染を起させて免疫を獲得させるといふ方法、普通接種として知られているものが一七二一年イギリスに導入されました。導入した

のはトルコ駐在イギリス大使夫人レイディ・メリー・モンタギュー (Lady Mary Wortley Montagu) でした。この方法は漸次イギリス国内で採用されました。同じ年、ボストンの有名な医師で聖職者コットン・ペザー (Physician-clergyman, Cotton Mather) が痘瘡に対する接種の成功の記事を読み、彼の友人ドクター・ザブデル・ボイルストン (Dr. Zabdiel Boylston) を説得して、これを試みさせました。この実験はめざましい成功で、この病気による死亡率が直ちに低下しました。

たいいていの医学の革新がそうであるように、この接種は何人かの医師からの強い反対をひきおこしましたが、その真価は数次の流行の際に確認され、その後ひろく使われるようになりました。

有名なアメリカの政治家で哲学者、ベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) は多くの医学・公衆衛生問題に関心を持った人でしたが、はじめはこの接種に反対しましたが、のちには精神的に支持するようになりました。かれの影響は、接種法反対を克服するのに重要でした。これらの努力が一世紀もつづき、ついにイギリスの田舎医師エドワード・ジェンナー (Edward Jenner) が、はじめて牛痘種痘によって痘瘡に対する免疫を与える方法を完成しました。この方式の接種、すなわち牛痘種痘は、世界からほとんど全く、この痘瘡のおそろしいムチを駆逐してしまいました。

四

アメリカ植民地と母なる国とのあいだに増大した敵意は、ついに独立戦争の勃発という結果となりました。これよりさき、入植地同志はもだたがいに遠くはなれていきましたが、ゆるやかな連合体 (confederation) をつくっていました。これらのアメリカ人は、めいめいの生まれた国はどこであれ、すべてイギリス国籍でした。それ以後の発展の百五十年のあいだに、入植者たちはその数を増し、当時世界最強のブリテン国の権威に挑戦できるだけの力と自信とを勝ち得ました。

医療もまた改善されました。医学校はまだありませんでしたが、十分に腕のある実地医家の数は、住民の平和時の医療

の必要には十分でした。いくつかの入植地では法律が通過し、実地診療する権利を、適正な訓練を受け、試験に合格して適格を証したものに制限しました。伝染病の予防のため検疫規則が設定されました。さきに述べましたように、最初の植民地病院が、一七五二年フィラデルフィアに、ペンジャミン・フランクリンの支持によって設立されました。

高等の学術研究の機関はすでにアメリカ植民地に存在していました。一六三六年にハーバード大学が創立されており、すこしおかれてカレッジ・オブ・フィラデルフィアその他いくつかが設立されました。それから一七六三年にアメリカ最初の医学校が設立されました。

それから四年後俊敏なベンジャミン・ラッシュがフィラデルフィア・カレッジの医学科に加わりました。このカレッジは一七九一年ペンシルバニア大学と結びつき、それ以来アメリカの医学教育に甚だ重要な役割を演じつづけてきました。

アメリカ革命が一七七五年に勃発しましたとき、植民地には戦の準備がありませんでした。事態はとりわけ陸軍の医療サービスにおいて深刻でした。多くのドクターが医務と軍務に志願しました。そしてその多くが自由のために戦って命をおとしました。しかしそこには組織立った医務局がありませんでした。

五

アメリカ大陸陸軍の衛生状態は悲しむべきものでした。衣服・住居・食糧の補給は貧弱で、そこには衛生的基準がありませんでした。というのは、病気の予防にこの基準の大切なことがわかっていなかったからです。軍隊を襲った多くの病気のなかで、発疹チフスをもつともおそろしいものでした。発疹チフスの病原体はコロモジラミではこばれますから、人がこみあつてきたない場所、たとえば兵営・監獄・船内といったところでは、どこでも発疹チフスは流行し、死亡率が高くありました。発疹チフスはこのようにおそろしいものでしたが、それでもなお陸軍将兵の力を弱め、命を奪ういくつかの病気の一つにすぎませんでした。

ただ一つのおかるい記録は、痘瘡（天然痘）の部分的制圧についてでした。予防接種は非常にひろく行なわれました。事実ジョージ・ワシントン総司令官は、全大陸軍隊は予防接種を受くべしという命令を發しました。

この措置の結果の正確な統計はのこっていませんが、北方部隊では痘瘡は「軍隊から完全に除去され」ました。

アメリカ植民地の医学の話といえは、絶対に必要だったドクターの数を漸次獲得していった話です。利用に堪える訓練施設は極度に限られていました。それに医療の義務が圧倒的に重くては、すぐれた人物が生まれたり、重要な医学的発見などなされることなど期待すべくもありませんでした。しかし戦後の時代には、事態はちがっていました。アメリカ人は國家を形成する国民となり、種々の専門分野に進んでいきました。そして間もなくアメリカ合衆国における医学の歴史はつくられはじめました。

六

この若い国の重要な人物は、なんとといっても、ベンジャミン・ラッシュでした。彼は卓越した医学を獲得した最初のアメリカ人で、新世界の医学教育の先駆者となりました。そして、精神病者の教育と手当の改善のためにたたかいました。彼は多くの医学論文を書いたばかりでなく、明析で典雅な表現を駆使できる人でした。

ドクター・ラッシュは多くの重要な本を書いています。なかでも *Account of the Bilious Remitting Yellow Fever as it Appeared in the City of Philadelphia in the Year 1793*（一七九三年フィラデルフィア市に發生した胆汁性間歇性黄熱の考察）は、本病のグラフィックな記載のすぐれたものです。この本は、毎日百名以上の黄熱患者の手当をした自身の体験にもとづいたものであります。なお彼はのちこの病気の犠牲になります。彼はまた前世紀の有名なイギリスの臨床家シドナムのラテン語の著書を英訳し、注釈を加えました。ラッシュはつとめてこのシドナムにあやからうと努力した人でした。

しかしラッシュの医学活動に劣らず活発であったのは、その種々の政治的関心で、彼の行政革新の熱意は大変なものでした。彼が推進した運動のいくつかは、当時としては抜本的なもので、そのため彼の職業的地位をいくらかを失いました。

ラッシュはその医学教育を、フィラデルフィアの知名な医師ジョン・レッドマン (John Redman) のもとで、六年間徒弟としてはじめました。これだけの徒弟修行で彼のアメリカ植民地で医療を行う資格は十分にあつたのでしようが、彼はもっと正規の教育をうけたい希望を持ち、エジンバラへ行き、そこで一七六七年に M・D の学位を受けました。それからロンドンへ行きましたが、ロンドンのきびしい気候にひどくなやまされました。それからヨーロッパ大陸の医学諸設備、とくにフランスのそれを歴訪し、これによって当時西半球の世界で受け得るもっとも行きとどいた医学訓練をおわりました。

一七六九年フィラデルフィアへ帰るや否や、ドクター・ラッシュはカレジ・オブ・フィラデルフィアが提供してくれた内科学教授の席を受諾しました。このカレジがペンシルバニア大学の一部になったとき、彼はひきつづいて教授の地位にとどまりました。彼は大いに成功した実地医家であつたと同様に、成功した教師となりました。

七

ところが、アメリカ革命は、彼に最初の政治的活動の機会きかひを与えました。独立戦争勃発前彼は政治的発展に関与し、コンティネンタル・ kongress (大陸議会) の一員となつていました。この kongress はアメリカ革命において植民地連合の指導的団体でした。この時彼はわずか三十歳でしたが、「独立宣言」に署名した四人の医師のうち最も著名な医師でした。

独立戦争のときラッシュは一時陸軍の Surgeon General (軍務総監) として参加しましたが、戦争が終つたあと、フィ

ラデルフィアに帰り、ふたたび医学活動をはじめました。敵意がおさまったとき、彼にあらたにもりあがった政治的・社会的関心は、彼をかりたてて、自分の注目をひいた革新運動に筆をとらせ、熱意をそゝがせました。彼の主張したところのいくつかは、たしかに抜本的なものでした。彼は奴隷制度に対するはげしい反対の立場にあって、アメリカ奴隷廃止者協会 Abolitionist Society of America の会長になりました。彼はまた監獄の改革について語り、書きました。そして、フィラデルフィア公立監獄の悲惨を軽減する協会 Philadelphia Society for Alleviating the Miseries of Public Prisons の指導的会員となりました。また彼は貧民のための無料公立学校、女子の高等教育のための無料の公立学校の設立を熱心に主張しました。彼の書いたものは、すべて彼の幅広い教養、非の打ちどころのない論理、簡潔な表現の才能、天与のシンラツな風刺を遺憾なく發揮しています。これらの多彩な才能は、彼の同僚間の気受けになにも加えるものではなかったことは申すまでもありません。しかしベンジャミン・ラッシュの本来の最大の関心事は医学でした。この医学分野でも彼の革新の熱意をかきたてるものがあるりました。一七八五年ラッシュはフィラデルフィアに合衆国最初の無料診療所を設立しましたが、ここで彼の二つの主要な関心等である医学の革新と社会の革新とをむすびつけました。

八

ドクター・ラッシュの医学的訓練のすばらしさは——外国の免許証のかがやかしさ、彼の患者の福祉への熱心な関心、患者に接する勤勉さとキチョウメンさは別としても——やがて彼に、その時代の人がもつともうらやましがる盛況をもたらしました。その鋭利な科学的好奇心に誘発され、また一方イギリスの偉大な臨床家トマス・シドナムの敷いてくれた方式に従い、ラッシュは病型の臨床的記載の先駆者でした。ところが彼の治療は、これに反して、ありきたりのものであったばかりでなく、遮血と洗腸（下痢）(purgings)を途方もなく極度にほどこしました。そのため、自分が精魂をそそぎ、臨床上の注意を傾けた患者たちを却って弱らせるようなかたむきがありました。しかしそういうのが二百年前の留学の慣

行でした。

九

フィラデルフィアの最も著名な医師の一人として、ドクター・ラッシュは、上述の間歇性黄熱の流行の由来と原因を見つけるのを自分たちの責任であると感ずる人たちの仲間に加わりました。このことは、パスツール・コッホ・北里・エルザン・野口英世等の細菌学者が伝染病の原因の追求に顕微鏡を使うことができたより一世紀以上もまえに起ったということは、注目すべきことであります。ただしラッシュがフィラデルフィアで黄熱の原因について見つけることのできたのは、原発地点と目せられるところへ、文字通り歩いていくことだけのことでした。これはつぎのようにおこなわれました。この伝染病の原因をさがしもとめているうちに、彼は港の近くに症例がもっとも多いことに気づきました。彼はやがて波止場に大量の腐ったコーヒーを見つけました。それは近所全体に大きな迷惑をかけるほどに腐敗していたのです。コーヒーを見つけ、それからたぐって、彼は「やがてこの熱のすべての原因をこの源までたどることができ」ました。これらの結論は「病人の発生した船の監視人」に確認されました。そしてさらに拡大して、だめになったコーヒーのほか、腐った獣皮、腐った動物性、植物性のものを熱の推定原因とし、つぎのように結論しました。外国人や水夫が感染したことを聞いたこともなければ、どの住居にもこの病気が見つかったもいないから、「それは輸入された病気ではない」と。

かくてラッシュは、流行の責任を市の不衛生な状態に帰し、これに関する警告をフィラデルフィアの新聞に公告するなごしたため、市民の怒りを一身にかぶりました。彼の医学の同僚は、彼を誹謗する側につきました。といひますのは、医師たちが怒ったのは、「ラッシュの診療が急にいそがしくなったことと、市民が自分たちのいのちがまもられたのは、ラッシュのくすりのおかげだとして、たくさんの人からの謝意がパッと噴き出したことに対して、彼に対する増悪をあらた

に起した」からでした。

ドクター・ラッシュの書きものを読みますと、対象は多岐にわたり、したがって若いアメリカ国民をむしばむ数々の病気があったことをとりあつかっており、また医師がそれらをなおすことが不可能であったこともわかります。すなわちラッシュは小児コレラ・デング・間歇熱、そしていわゆる熱による発熱 (thermal fever) すなわち過熱した湯を飲んで起ると彼が信じていたものなどについて書いています。

ラッシュはまた「むしばを抜けばなおる数々の病気の考察」(An Account of the Cure of Several Diseases by the Extraction of Decayed Teeth)と題する本のなかで、「病巣感染」の問題をとりあげた最初の人でした。そのため、関節炎、痛風、レウマチその他、ごく普通の治療でならくならなかった類似の疾患の治療に数かぎりない抜歯がおこなわれるきっかけになりました。病因がはっきりしないとき歯を犠牲にして病気をなおし、ラッシュは、扁桃摘出手術への道をひらきました。すなわち扁桃摘出手術は今世紀のはじめになってシカゴの著名な医師、ドクター・フランク・ビルिंगス (Frank Billings) が病巣感染克服のいまひとつの方法として唱道したものです。

10

もしこれらの対象が二百年前のアメリカ医学の多くの医学的関心事を示しているとすれば、もう一つ、特に大いに注目しなければならなかった医学の面があります。それは精神医学の問題です。

いうまでもなく明白なことは、アメリカ入植者のような人々は、イギリス生れの人や、オランダ生れの人や、そのほか厳格な戒律を守る種々の宗派の人々の混合からなっているので、いずれも、かれらの故郷の国と、そして住みなれた環境から遠くかけはなれてなやみ抜いているので、そのためにややもすれば情緒の不均衡や精神病になりやすくなっています。

二百年前には医学の専門分化ということがまだ行なわれていませんでしたから、精神病学の分野に練達の人がいなかったことは、驚くに当たらないとおもいます。ドクター・ラッシュが精神病患者の力になろうと決心したのは、ひとえに彼人間愛的な人柄によるのであって、精神病学の分野の練達の士になろうというのではなかったのです。しかし彼の書いたものを読めば、彼が精神病患者相手の仕事をしているうちに彼はどんなに練達者になったかがあきらかにわかります。

ベンジャミン・ラッシュの精神医学への寄与は、病院付の医師に選ばれた後なされました。この病院はそれより約三十年前に「精神異常者の治療と手当」のために、たてられたものでありまして、そのねらいは、それによって「彼等が理性をとりもどし、地域社会の有益な一員になる」ためでした。当時精神異常者に対するあらゆる新しい処置では、かれらを健康に復帰せしめることはほとんど望めませんでした。当時一般に、精神医者と診断された人は、熱、寒、その他の物理的な不快にも不感であると信ぜられておりました。

ラッシュはこの事情を数年にわたって調査し、それから、患者の「あて」のない、でたらめの処置と、わるい住居について批判をはじめました。一七八九年彼は患者収容所の衛生環境の改善を要求し、もっとも大切なことは、彼は、気の狂った人でも働くことができるということで雇用を要求しました。これらの改良はわれわれには簡単なように見えますが、当時は合衆国における精神病治療についての全く新しい考えであったのです。

モートンの「ペンシルバニア病院の歴史」（フィラデルフィア、一八五五年）によれば、精神異常者に爾来与えられていた精神的処置は、かれらを健康にたちもどらせるには不適當であったそうです。温水と冷水の奔流を交互に患者にあてたり、頭頂をそり落してそこを水ぶくれにし、仮死状態に至るまで遮血しました。また下剤をかけて、もう粘液しか出なくなるまで消化管を掃除します。その中間にはかれらは鎖を腰か足首にかけられ、独房の壁にしばりつけられました」（ベッドラム・ホガス）独房そのものはきたなくて、暖房設備は全くなく、建物の一階にあって、見物人の群が独房の窓からたやすく見られるところになり、そこから病人の奇態な行動が見られるようにしてありました。このような、見物

人が精神異常者に与える障害をとりのぞくため、木の垣根を窓の前にたてましたが、それだけでは群集をよせつけなくするには不十分でした。一七六二年に発令されたこの禁止命令に、好奇心からこの家を訪れるものは一定額の入場料を払うべしと規定したにかかわらず、好奇心の持主を引きとめる効果のないことがわかりました。

何年かだまって観察したのち、ラッシュは、患者の、なおも「あて」のない処置や住居の悪さに対して、声大にして「とりなし」をはじめました。彼は患者の沐浴の設備と世話をするものの雇用とを要求しました。これは簡単な要求のように見えますが、合衆国における精神病患者の処置の全く漸新な思想を代表するものでした。

そのほかの偉大な示唆は、患者を世話をするに適した人を見つけることであるというものでした。全体として、ラッシュの精神医学における主な革新は、アメリカ人の精神障害者のための見込を、救いなく見捨てられ、疲弊におちいるという暗い未来から、ひょっとしたら快方に向い、あるいは治るかもしれないという明るい未来に変えたことであります。

ラッシュの精神病学的思考の真髓を、彼はその著 *Medical Inquiries and Observations upon the Disease of Mind, 1812* 「精神の病に関する研究と観察」(一八一二)に集積しました。彼のいずれの行文、ことにこの「研究」の行文は、今日でもその感受性の高さ、理解の深さは賞讃に価するものであります。特に重要なのは、精神病はなおるといふ標題の文が繰り返えし出ていることであります。これによって、ラッシュは、このことを学生や読者に印象づけることができ、ついに「一度気がいになれば一生気がい」(once insane always insane)と長く信じこんでいたのから解き放つことになりました。

一一

ベンジャミン・ラッシュの生涯は一八一三年に終わりました。当時としては長寿の六十八歳でした。この時代はずでにアメリカの留学は以前の母なる国イギリスのそれに追いついていましたが、それでもなお、尊敬を受ける医師になるために

は、ヨーロッパで卒業教育のための数年間を過したということが望ましいと考えられてはいました。独立戦争のころからアメリカ独立の当初の何年間にかけては、新しい国民にとって医学的にもっとも困難な年々であったことは疑いを容れません。そしてベンジャミン・フランクリンの生涯が、イギリスへの政治的依存の年代と、独立後の早期の年代とにまたがっていることを想うとき、それはわれわれに「二百年前はこんなだった」(“The way it was two hundred years ago”) (注、昨年これが来るべき二百年記念祭のスローガンとなった)ということの深い洞察と理解とを与えてくれます。

原文は第二十二卷第一号に掲載

(緒方富雄訳)

京都に山脇東洋観臓記念碑完成

宗 田

一



誓願寺の山脇東洋の墓に新造した上屋と
解剖供養碑(左側正面)

本会々員をはじめとし、全国の医療関係者千名をこえる多数の方々による醸金によって、山脇東洋観臓の地、六角獄舎址（京都市中京区六角通大宮西入・財団法人京都感化保護院内）に、昭和五十一年三月七日記念碑が建ち、同日午前除幕式が現地で行われたのち、午後から京都府医師会館で記念祝宴、記念式典および記念講演会が盛大に挙行された。

この記念碑の発起団体は、日本医師会・日本医史学会・日本解剖学会および京都府医師会の四団体で、実務は京都府医師会館内に設けられた「山脇東洋顕彰会」（代表・守屋正）が担当、京都府医師会に「山脇東洋先生観臓記念碑建立特別委員会」が設置されて運営された。

また、同会の手によって京都・新京極裏の誓願寺墓地内にある山脇東洋夫妻墓と解剖供養碑の保存整備もあわせ行われた。



山脇東洋観臓記念碑

日本近代医学のあけぼの
山脇東洋観臓之地
1754・宝暦四年閏二月七日

記念碑の碑銘・碑文は次の通り（設計・守屋正・撰文宗田一）

（碑銘）

（碑文）

近代医学のあけぼの観臓の記念に一七五四年・宝暦四年閏二月七日に山脇東洋（名は尚徳、一七〇五一七六二）は所司代の官許をえて、この地で日本最初の人体解屍観臓をおこなった。江戸の杉田玄白らの観臓に先立つこと十七年前であった。

この記録は五年後に『蔵志』としてまとめられた。これが実証的な科学精神を医学にとり入れた成果のはじめで日本の近代医学がこれからめばえるきっかけとなった。東洋のこの偉業をたたえるときにも観臓された屈嘉の霊をなぐさめるためここに碑をたてて記念とする。

一九七六年三月七日

日本医師会
日本医史学会
日本解剖学会
京都府医師会

誓願寺墓地内の説明文は次の通り（設計・藤垣亀雄、撰文・宗田一）

山脇東洋のヒューマニズム

山脇東洋（一七〇五—一六二）は十八世紀の京都が生んだ名医です。

一七五四・宝暦四年に日本ではじめて医学の目的で人体の内臓をしらべ、『蔵志』を刊行して実証的な科学精神の灯を医学界に点じました。

十七年のちの江戸・杉田玄白らの観臓はこの東洋の偉業が引き金となったものです。

東洋は観臓の一カ月あとに慰霊祭を行なっています。東洋のヒューマニズムのあらわれです。

山脇一門はその後も熱心に人体内臓の研究を重ねてすぐれた業績をあげ、また解剖供養碑をたてて慰霊しています。この供養碑には男女十四柱の戒名が刻まれ、東洋の精神をうけついでいます。

昭和五十年三月七日

山脇東洋顕彰会

前記当日、本会々員多数が参列したが、記念祝宴では中野操関西支部長、田中助一評議員の祝辞があり、記念講演会では「山脇東洋のあとさき」と題する小川理事長の講演があった。

なお、当日の出席者には記念冊子と美麗な京都医史址地図を含むリーフレットが配布されたが、当日欠席の醸金者には追って収支決算報告書・寄付芳名録とともに郵送される。



山協東洋観臓記念碑建立記念式典
平沢興先生の挨拶（昭和51年3月7日）

計報

いしだけんじ
石田憲吾氏 逝く

石田氏の御経歴を掲げ謹んでご冥福を祈ります

明治三十七年四月二十九日生

本籍 広島県 住所 広島県佐伯郡廿日市町住吉

宮崎小学校、県立宮崎中学校から旧制第五高等学校を経て、

昭和六月三月岡山医科大学を卒業

同校眼科教室に入局し、畑教授の門下に入る。

昭和十四年同教室講師

勤務歴は倉吉厚生病院、広島製鉄附属病院、農協佐伯病院、

広島鉄道病院を経て、昭和三十九年四月広島県佐伯郡廿日市

町に眼科を開業

医学史研究歴 岡山医大在学中より関心を抱き、資料蒐集を

始め、勤務医時代を通じて地味な活動をする。その業績は広島

県医人伝の労作であり、それらは「広島医学」に数多く発表

した。本年より発表予定していた統芸備医人伝は故稿として「

広島医学」に連載予定である。

所属団体と役職

日本医史学会評議員

広島県医師会史編纂委員

東洋古典医学研究会理事（広島市）

昭和五十一年一月七日 仏領ニュー・カレドニア、パイン・

ランドで観光旅行中、心臓疾患のため急逝。



肺への移行濃度が高い
抗生物質です。



抗生物質製剤

ジョサマイシン錠

【包装】200mg 100T 500T 50mg 100T
【薬価】200mg 1T 66.00 50mg 1T 17.30

★副作用・使用上の注意等は
添付の説明書をご覧ください。

ジョサマイシン感受性のブドウ球菌、レンサ球菌、肺炎球菌および赤痢菌による下記感染症：肺炎、急性慢性気管支炎、気管支肺炎、気管支拡張症、咽喉頭炎、扁桃炎、副鼻腔炎、中耳炎、猩紅熱、敗血症、膿皮症、毛のう炎、疔瘡、癩、よう、癰腫症、感染性粉瘤、癰疽、蜂窩織炎、涙のう炎、麦粒腫、霰粒腫(化膿性)、眼瞼炎、膿瘍、術後感染、火傷後感染、創傷感染、乳腺炎、リンパ管(節)炎、唾液腺炎、副睾丸炎、精のう腺炎、尿道炎、膀胱炎、細菌性赤痢。 歯科領域における次の感染症：骨膜炎、歯根膜炎、智歯周囲炎、上顎洞炎、関節炎、顎炎、歯槽膿瘍、歯槽骨炎。

754Jm1A2

M5039

アレルギー疾患に...

■抗アレルギー・抗炎症・解毒・肝保護作用をもつ

健保略称

強ミノC

強力ネオミノファーゲンC

包装 2ml 10管・100管, 5ml 5管・50管, 20ml 5管・30管

健保薬価 2ml 32円, 5ml 41円, 20ml 167円

●適応症

肝炎、肝障害、感冒、気管支炎、喘息、腎炎、ネフローゼ、血管性紫斑病、白血球減少症、自家中毒、湿疹、皮膚炎、蕁麻疹、小児ストロフルス、神経痛、リウマチ、腰・背痛、妊娠中毒、特発性腎出血、急性出血性膀胱炎、中耳炎、副鼻腔炎、口内炎、フリクテン、結膜炎、角膜炎、薬物過敏症など

[文献進呈]

●内服療法には

グリキロン錠2号

包装 1000錠, 5000錠

健保薬価 1錠 3.80円

文献御申越先 ミノファーゲン製薬学術部 (〒107)東京都港区赤坂8の10の22 (ニュー新坂ビル)

日本医史学会会則抄

第一条 この会は、日本医史学会 (Japan Society of Medical History) とし、

第二条 この会は、事務所を〒113東京都文京区本郷二―一―順天堂大学医学部医史学研究室室内におく。

第三条 この会は、医史を研究しその普及をはかるを目的とする。

第四条 前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1) 学術集会、その他講演会学術展観の開催等

(2) 機関紙「日本医史学雑誌」「日本医史学会々報」および関係図書等の刊行。

(3) 日本の医史学界を代表して内外成の関連学術団体等に機関との連携

(4) その他前条の目的を達するために必要な事業

第五条 この会の会員は次のとおりとする。

(1) 正会員

この会の目的に賛同し会費年額四、〇〇〇円を納める者ただし、外国居住者は年額20ドルとする。

(2) 名誉会員

この会に対し功績顕著であった者で評議員会の議決ならびに総会の承認を得た者。

(3) 賛助会員

この会の目的事業に賛助し会費年額一〇、〇〇〇円以上を納

める者、または団体。

第六条 正会員になろうとするものは評議員の紹介により、理事長の承認を得て入会金一、〇〇〇円およびその年度の会費を添えて所定の入会申込書を提出しなければならない。

第七条 名誉会員は次の各号の何れかに該当し理事会、評議員会が功績顕著と認めた者であることを要する。

(1) 三十年以上の在籍正会員であつて七十歳に達した者。

(2) 前理事長。

(3) 正会員または外国人で功績顕著な者。

名誉会員は終身として会費を免除することができる。

第八条 賛助会員になろうとする者も第六条に準ずる。

第九条 会員には次の権利がある。

(1) この会の発行する機関誌の無償配布をうけること。

(2) 機関誌を投稿すること。

(3) 総会、学術大会、学術集会その他の事業に参加すること。

第十条 会員は、会費を前納し総会の議決を尊重しなければならない。

第十一条 会員は次の事由によつてその資格を失う。

(1) 退会

(2) 会費の滞納が一年以上を経過したとき。

(3) 禁治産、準禁治産または破産の宣告。

(4) 死亡、失踪宣告または会員である団体の解散。

(5) 第十四条による除名処分。

この会は学術大会を毎年一回開催し、学術集会は随時開催す

る。

第十二条 この会には、年一回学術大会を主宰するために会長を一名おく。

2 会長は、理事会の推薦により、通常総会毎に理事長が委嘱する。

3 会長の主宰する学術大会は、この会の通常総会と同時点で開催することを原則とするがやむを得ない事情のある場合は評議員会または総会の承認を得て変更することができる。

4 会長の任期は、学術大会を議決した通常総会の翌日から次の学術大会を終了するときまでとする。

5 会長は必要に応じ理事会に出席しこれと密接な連絡のものに計上予算を勘案して企画運営する。

6 会長に事故あるとき、または欠けたときは新に会長を委嘱するまで理事長がその職務を代行する。

7 会長は、学術大会関係事務を委嘱するために、会員のうちから学会委員若干名を選任することができる。

8 学術集会は、随時理事長主宰のもとに開くことができる。

『日本医史学雑誌』投稿規定

発行期日 年四回（一月、四月、七月、十月）末日とする。

投稿資格 原則として本会々員に限る。

原稿形式 原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表題、著者名のつぎに欧文表題、ローマ字著者名を記し、本文の終りに欧文抄録を添えること。

原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。

原稿の取捨選択、掲載順序の決定は編集委員が行なう。また編集の都合により加除補正することもある。

著者負担 表題、著者名、本文（表、図版等を除く）で五印刷ページ（四百字原稿用紙で大体十二枚）までは無料とし、それを超えた分は実費を著者の負担とする。但し欧文原著においては三印刷ページまでを無料とする。図表の製版代は実費を徴収する。

校 正 原著については初校を著者校正とし、二校以後は編集部にて行なう。

別 刷 別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

原稿送り先 東京都文京区本都二丁目一の一、順天堂大学医学部
医史学研究室内 日本医史学会

編集委員 大島蘭三郎、大塚恭男、蔵方宏昌、酒井シヅ、樋口誠

太郎、室賀昭三、矢部一郎、矢数圭堂 事務担当 鈴木滋子

編集顧問 小川鼎三、A・W・ピーターソン

日本医史学会役員氏名(五十音順)

理事長 小川 鼎三
 常任理事 高瀬 武平
 會計監事 石原 明
 宗田 一
 大島蘭三郎

幹事
 赤松 金芳 阿知波五郎 石川 光昭
 今田 見信 内山 孝一 大塚 敬節
 大塚 恭男 大矢 全節 緒方 富雄
 蒲原 宏 佐藤 美実 杉 靖三郎
 鈴木 正夫 鈴木 勝 宗田 一
 戸近太郎 中野 操 三木 栄
 矢数 道明 吉岡 博人 和田 正系
 大塚 恭男 酒井 シツ 杉田 暉道
 谷津 三雄

日本医史学会評議員氏名(五十音順)

赤松 金芳 安芸 基雄 阿知波五郎
 青木 一郎 石原 明 石川 光昭
 石原 力 今市 正義 今田 見信
 岩治 勇一 内山 孝一 大島蘭三郎
 大塚 敬節 大塚 恭男 王丸 勇
 大矢 全節 緒方 富雄 小川 鼎三
 大滝 紀雄 片桐 一男 川島 恂二
 蒲原 宏 久志本常孝 榊原悠紀田郎
 酒井 シツ 酒井 恒 佐藤 美実
 杉靖三郎 杉田 暉道 鈴木 正夫
 鈴木 勝 鈴木 宜民 瀬戸 俊一

関根 正雄 宗田 一 高木圭二郎
 高瀬 武平 高山 担三 田中 助一
 津田 進三 筒井 正弘 土屋 重朗
 戸近太郎 中泉 行正 中川 米造
 中沢 修 中西 啓 中山 沃
 長門谷洋治 中野 操 服部 敏良
 巴陵 宣祐 福島 義一 藤野恒三郎
 本間 邦則 富士川英郎 古川 明
 丸山 博 松木 明知 三浦 豊彦
 三木 栄 三廻 俊一 谷津 三雄
 山形 敏一 矢数 道明 山下 喜明
 山田 光胤 安井 広 吉岡 博人
 和田 正系 以上

編集後記

第十七回日本医史学会総会がやって来た。最近一般演題も多く、雑誌への論文投稿もふえており、喜ばしい状況ですが、編集委員の方から演題抄録や論文の投稿に際してお願いがあります。投稿の際には、総会演題(抄録)募集の文章や雑誌巻末の投稿規定を必ずお読み下さり、その規定を守っていただきたいと思えます。そこで、雑誌投稿の例にとって申しますと、欧文表題、欧文抄録を必ず添えること。欧文の苦

手の方は学会に相談下さい。(編集顧問にピーターソン氏がいます。)論文は楷書で清書したのを出して下さい。著者校正は出来るだけ正確にやって、出来るだけ速く返送して下さい。
 雑誌発行は学会の柱であります。編集委員会の責務の重い事とともに、理事、評議員、一般会員の注目と協力なくしては、立派な雑誌は出来ません。よろしく願います。(矢部)

昭和五十一年四月二十五日 印刷
 昭和五十一年四月三十日 発行
 日本医史学雑誌

第二十二卷 二号
 編集者代表 大島 蘭 三郎
 発行者 日本医史学会
 代表 小川 鼎三
 〒二三 東京都文京区本郷二一
 順天堂大学医学部医史学
 研究室内
 振替 東京 一五二五〇番

製作協力者 金原出版株式会社
 日本医学文化保存会
 〒二三 東京都文京区
 湯島二一三二四

印刷社 三報社印刷株式会社
 〒七四 東京都江東区亀戸

漢 方 薬

高島堂薬局

東京都文京区本郷 5 - 24 - 4
TEL (03) 811-1657 赤門となり

全国 医学・薬学・化学・雑誌広告取扱

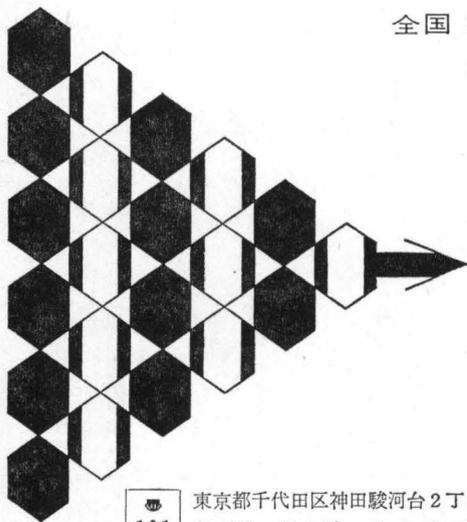
本 誌 広 告 取 扱

祝 盛 会

各学会の雑誌、抄録、プログラム及び名簿
等の印刷並に広告掲載のお世話を致します

廣 告 代 理 店

日本医学広告社



101

東京都千代田区神田駿河台2丁目9番地
電話 (292) 6961 (代表)

各学会の雑誌、抄録、プログラム、名簿及び各大学同窓会名簿、
各県医師会名簿などの印刷ならびに広告掲載のお世話を致します

06-943-1511

各医学雑誌の広告を取扱う 福田商店広告部

大阪市東区島町2-26

分室 大阪市東区釣鐘町1-17(橋本ビル) TEL大阪(06)943-1511(代)

- On Hermann Lebert's *Handboek d. Prakt. Geneeskunde*.
 Groningen (1861—1863) and its Japanese translations:
IRYO-SHINSHO (1868) and Leberts' *CHIFUSU-*
SHINRON (1879), and its significance.....Goro ACHIWA...(32)
- On the descriptions of the respiration and oxygen in some
 books by Udagawa YōanIchiro YABE...(33)
- Les cliniques par le Dr. allemand Junker von Langeegg
 dans l'Hôpital de KyotoZensetsu OHYA...(35)
- Slides on Harutoyo OMORI, the first president of Kyushu
 UniversityKatsuya URUNO...(35)
- Short biography of William Turner as the original author of
Kaitai Seiri Zusetsu published in JapanHiroshi KAMBARA...(36)
- Controversy concerning the first discovery of the fingerprint
 system (Dactyloscopy)Yoji NAGATOYA...(37)
- Bicentennial of Independence of U.S.A. and Dr. Benjamin
 RushAkira FURUKAWA...(38)
- The Surgery at the Juntendo Hospital from 1889 to 1898
Shizu SAKAI and Shigeko SUZUKI...(40)
- Studies on history of school health in the Taisho era (1)
 Toyokichi KitaMorikuni SUGIURA...(41)
- A Few Scenes From History of ScreeningTakuji MIWA...(43)
- Health Service and Moral PhilosophySoji KURIMOTO...(44)

The 77 th General Meeting of the Japan Society of Medical History Members' Presentation

- On the footnotes of the "Ontleedkundige Tafelen."(1)
Hisashi SAKAI...(12)
- Seminar and a short medical history in Japan
Kisaku TERAHATA...(13)
- A study on Gen NAKARAI the first anatomist in Fukui
 clanYuichi IWAJI...(15)
- Shinryo Tsuboi and Fukui, concerning about Sadoke-
 MonjoShinichi TAKEUCHI...(16)
- On the ORANDA SHOSEKIMOKUROKU (A List of
 Dutch Books) by Tyoshuku YOSHIDAHajime SODA...(17)
- Albrecht von Roretz and the transcript of his lecture on a
 microscopyTsunesaburo FUJINO...(18)
- A study of the register of medical disciples in Kyoto in
 the Edo periodYoshikazu SUGITATSU...(19)
- On "Yōi Shinsho"(New book on Surgeon) (Part 1)
Ranzaburo OTORI...(20)
- Hot-spring cure and the faith of "Yakushi" (Bhaisajyaguru)
Osamu NAKAZAWA...(21)
- An Ancient Sutra "Jizenbyo-hiyoho" and Its Influence
 upon Our Psychiatric PsychotherapyShunzo TAIH...(22)
- Maithreya's reborn Sutra and Faith from Disease-healing
Masao SEKINE...(23)
- On the status of the "Yishi" from Tang to Qing dynasty
Noriko YAMAMOTO...(25)
- On the Lineage of the medical officer in ancient Japan
Taku SHINMURA...(26)
- On the literalization of medicineSakae MIKI...(27)
- Relationship between Chutaku Sasaki and Gentaku Otsuki
Shoichi YAMAGATA...(29)
- On "OBOKO. NASHI. DARUMA. NAMARI. OTSUGE"
 and the life of Bunsui IGARASHIEiten TAMATE...(29)



スムーズに たゆみなく——

血行改善剤

メグリン[®]

ヘブロニケート 〈健保適用〉

【作用】

血管拡張・血流増加作用、血清脂質低下作用(コレステロール・トリグリセライド・遊離脂肪酸など)、実験的動脈硬化抑制作用、プラスミン活性化作用

【適応症】

- 動脈硬化性末梢循環不全、閉塞性動脈硬化症、閉塞性血栓性血管炎(バージャー病)、レイノー病、その他：上肢しびれ感などの末梢循環障害の愁訴など。

● 凍瘡・凍傷

【用法・用量】

通常、成人には1日3錠を3回に分け、食直後に経口投与するが、必要に応じて1日6錠とする。

なお、年齢・症状により適宜増減する。

【使用上の注意】

- 1) 本剤は重篤な肝・腎疾患のある患者に対しては投与しないことが望ましいが、特に必要とする場合には、慎重に投与すること。
- 2) 本剤の投与により、発赤・熱感・蟻走感・痒痒感が、またときに、口渇、食欲不振・胃部不快感・嘔吐・下痢等の胃腸症状があらわれることがある。このような症状があらわれた場合には、減量又は休薬する等適当な処置を行なうこと。



吉富製薬
大阪市東区平野町3-35

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japan Society of Medical History

Vol. 22, No. 2

April, 1976

CONTENTS

The 77th General Meeting in Japan Society of Medical History Special Lectures

- Medical History of Ishikawa prefecture in Edo Era
..... Shinzo TSUDA... (95)
- Pharmacology and Harbages in the Toyama Clan.
..... Tsuneo NANBA... (101)
- The employed foreign teachers and their around in
medical education of Ishikawa prefecture
..... Buhei TAKASE... (104)

Articles

- Regarding notes of thought and personal letters
written by Dohkai Hayashi in the later part
of his life Shigeaki TSUCHIYA... (140)
- Contagions of Smallpox, Measles and Chickenpox
to Shogunate Family in Ooku from the Common
People of Edo City Kyutaro MAEKAWA... (157)
- Hayano Family (Ancesters of Genshun Koishi) in
the Obama Clan Yoshihiro TANABE... (169)
- Miscellaneous** (181)

The Japan Society of Medical History
Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2-1-1, Bunkyo-Ku, Tokyo